

第八編
觀

光

第一章 霧島屋久国立公園

牧園町は観光の町であり、昭和九年（一九三四）三月十六日、雲仙や瀬戸内海とともに指定された、わが国最初の国立公園であり、霧島国立公園と称した。この国立公園は、鹿児島県側は霧島町・牧園町・栗野町、宮崎県側はえびの市・小林市・都城市の一部にわたる地域で、両県にまたがる東西二二キロメートル、面積二万二四七ヘクタールに及んでいる。また、昭和三十九年（一九六四）三月十六日、桜島・錦江湾・佐多岬・屋久島まで含めて、霧島屋久国立公園と改称され、その総面積は、五万四八三三ヘクタールとなった。

霧島山は、わが国南端の高峰であり、洋上はるか見渡す位置にあることから考えると、有史以前、南方民族が北上移住してきた時の、目標になったであろうとも推測される。そして、まずその周辺、いわゆる薩摩・大隅の地に定着し、ここを根拠地として、原住狩猟民族を圧迫し、あるいは同化し、更に中央へと広がっていったこと

だろう。

比較的狭い区域内に、主峰韓国岳をはじめとして、二三座の典型的な群状火山があり、爆裂火口八、火口湖一〇を数え、コニーデ型・ホマリーテ型・トロイデ型と、いろいろな形の火山が聳立する中に、満々と蒼色あさぎの水をたたえた湖沼の美が、更に神秘さを加え、山群の中腹八〇〇メートル付近の緑林、赤松林の中から、白煙を噴き上げる数多くの温泉群の湯煙は、霞かすみか雲かと見まごうばかり、その恵まれた景観、自然美は世界でもまれであり、登山の人々の目に、強い印象と喜びを与えている。



霧 島 山

また、霧島は、その恵まれた自然の景観だけでなく、ミヤマキリシマ・ノカイドウ・イワカガミなどの高山植物から、珍しい昆虫類、鳥類など、貴重な学術資料も多い。各学会の研究者、文人、歌人らも相次いで訪れ、その名声が高く、天然記念物も多い。

しかし、中央から離れたへき遠の地で、観光的にはよそに立ち後れていたが、近年、観光ブームの波に乗って、施設も整えられ、道路も整備されてきた。特に、昭和三十四年、道路公団による有料道路が、林田温泉―高千穂河原間に開設され、更に同三十六年十一月に、南北霧島道路をつなぐ中央スカイラインが完工し、えびの―小林間が接続するに至り、がぜん、霧島観光地として脚光をあび、また、翌四十七年、鹿児島空港の開設とともに、訪れる観光客の数は、年々大幅に増加の一途をたどっている。これに合わせて、牧園・霧島の地元も、宿泊施設、その他観光誘致のため専念しており、温泉ボーリングの白煙が高く噴き上がり、そのにぎわいぶりは昔日の比ではない。

道路公団の有料道路も、昭和六十年十二月一日で、無料開放され、一般県道となった。

〔参考〕 観光姉妹町の盟約

景勝の地として、昭和九年に霧島国立公園と同時に指定された。長崎県の雲仙国立公園の地元である小浜町と、霧島町・牧園町は、昭和四十四年九月十八日に、観光姉妹町として、盟約の提携をした。

その動機は、霧島・雲仙共に景勝地として、昭和九年三月十六日、わが国で最初の国立公園として指定されており、「今後、観光の将来性と公益性を正しく見つめ、九州の北と南から、お互いに理解と親善を深め、相協力して観光開発に努め、広域観光圏完成の推進力になろう」ということで、明治から一〇〇年に当たる昭和四十四年に提携した。それ以降、三町交替で定例会を開き、親善を深めている。

次に観光面からみた霧島の自然を紹介しよう。

一 植 物

南国の特徴として、山々の山腹は昼なお暗い常緑照葉

樹を主とする天然林に覆われている。有名なミヤマキリシマをはじめ、天然記念物のノカイドウ、そのほか特殊な植物が多く、登山中にそれらの生態を十分に観賞することができらる。

この霧島は、垂直的には標高三〇〇メートル付近からはじまり、最高は韓国岳の一七〇〇・三メートルの間を占めている。気温が温暖で、降雨量が多いことと、火山の中腹以下は、火山砂礫が安定して、適潤な風化土壌となり、植物の生育に適するため、合わせて一三八科、五一〇層、一二五〇種もの多くの種類が生育している。

1 山ろく地帯（標高五〇〇〜八〇〇メートル）

町営牧園牧場から霧島温泉の林田付近にかけての地帯で、常緑照葉樹がよく繁茂し、暖帯多雨林の典型的な林相を示し、蔓性植物や着生植物もよく発達している。

主な樹種としては、常緑広葉樹のイチイガシ・ウラジロガシ・アカガシ・タブ・ホソバタブ・イスノキ・ヤブツバキ・ヤブニッケイ・サカキ・ヒサカキ・コジイ・イタジイ・アオキなどが多い。また、落葉広葉樹では、ミズキ・クマノミズキ・ハリギリ・イヌシデ・アカシデ・ミズメ・ヤマザクラ・ホオノキなどがある。このほか一

部には、針葉樹のイヌマキ・イヌガヤ・カヤ・クロマツ・アカマツも混生し、峰通りでは、アカマツ・モミなどが優生樹として繁茂している。

2 山腹地帯（標高八〇〇〜一二〇〇メートル）

この地帯は、モミを優生樹とする下帯と、アカマツを優生樹とする上帯とに区別される。

下帯は、モミのほかにアカガシ・タブ・ヤブニッケイ・シロダモ・カクレミノが多い。そして、上帯では、アカマツのほかにツガ・イチイ・ブナ・ミズナラ・カエデ・ヤマザクラ・ハリギリ・シキミ・ハイノキなどの広葉樹が多く、秋にはカエデ・アカシデ・ミズナラなどの落葉広葉樹が美しく紅葉して、南国では珍しいほどの美観を呈する。特にこの地帯は、天然のままに保存されている点で、優れた美を有している。

3 大浪池—韓国岳付近（標高一三〇〇〜一七〇〇メートル）

この地帯では、モミ・ツガ・ハリモミ・ブナ・ミズナラ・オオガメノキ・ツクバネウツギ・ヒメヤシヤブシ・ナナカマド・ノリウツギなどの落葉広葉樹が多い。そして、高度を増すに従って、ドウダンツツジ・ミツバツツ

ジ・ミヤマキリシマが多く、草本としては、ススキ・ツクシゼリ・イタドリ・オトギリソウ・マイヅルソウなどが多くなっている。また、スズタケも樹下に群落をなしている。

霧島山系の植生は、地形の変化が激しく非常に複雑な森林構成となっており、主な群落は次のように区分される。

(1) ウラジログシ・サカキ群落

ウラジログシを主体として、ホソバタブ・ヤブニッケイ・ヤブツバキ・サカキの優占度の多い林分で、五〇〇メートルから八〇〇メートルの湿地や、適湿の腐植土の多い谷間にみられる。

(2) アカマツ・ヤマツツジ群落

アカマツを優占種として、ソヨゴ・ネジキ・ヤマツツジなどが強く結びつき、尾根部の日当たりのよい乾燥地、岩角地又は尾根の突出部で、標高五〇〇メートルから一〇〇〇メートルの間にみられる。

(3) ツガ・ハイノキ群落

ツガを優占種として、ハイノキ・シキミ・ヒメシャラを多く含む林分で、尾根の土壌の深い中陰又は陽地で、

やや乾燥している標高八〇〇メートルから一二〇〇メートルの地帯にみられる。

(4) ブナ・スズタケ群落

ブナを優占種として、ミズナラ・リョウブ・コハクウソボク・コミネカエデ・ナツツバキを含む林分で、林床はスズタケで覆われている。尾根の土壌が多く、比較的ゆるやかな傾斜面又は上部の尾根にかけて、標高一〇〇〇メートルから一六〇〇メートルの高地にみられる。

ミヤマキリシマ

あまりにも有名なこのツツジは、新燃岳・中岳を中心として、火山山頂の草原一帯に分布していて、五月中旬から六月初旬にかけて、紅・紫色とりどりのジュウタンを敷いたような装いとなり、ハイカーでにぎわう。「花を愛する心は、平和を愛する心」といわれる。かつて、NHK主唱で「郷土の誇りとする花」を広く全国から募集したところ、霧島山に最も多い、かれんな花を開くミヤマキリシマが、郷土の花（県花）として、昭和二十九年（一九五四）三月二十二日に決定した。

足もとに芝のはうように七う八センチメートルの芽立ちしているのが、そのツツジである。大浪池から韓国岳

の頂上付近にかけてもよく繁茂している。花には赤・白・赤紫などがあり、開花時の美観は何ともしようとえない。現在は、韓国岳・新燃岳・中岳に次ぎ、高千穂峰頂上まで、広大な美しい花の分布がみられる。

このツツジは、高山に生ずる常緑灌木で、山頂付近では、高さがわずか一〇センチメートルばかりで、枝は繁密である。花は小形で長楕円形をなしてとがり、毛がある。開花期は五月初旬から六月初旬ころまでである。花冠は三センチメートルに満たず、辺縁は五裂し、花冠面に細点のあるものもある。

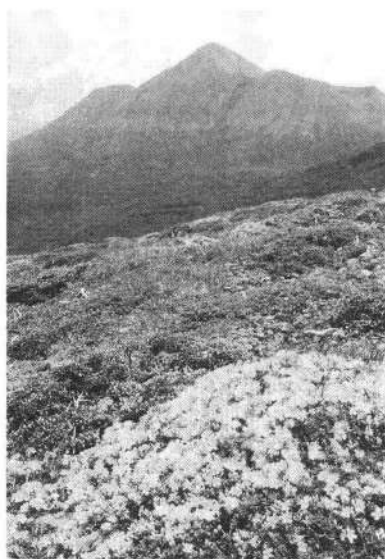
ノカイドウの自生地 ノカイドウは、明治四十二年（一九〇九）植物学者牧野富太郎博士によって発表され、大正十二年（一九二三）三月、農林省が天然記念物として指定した。

原産は中国で、わが国でも栽培されているカイドウの変種とされ、霧島火山群のえびの高原の溪流に沿って群生している。高さは一・五メートルから三メートルぐらいの落葉小喬木で、多数の小枝を出し、密に分岐する。葉は倒卵楕円形で鋭角、鋭脚、細鋸歯縁、花は五月初旬、散形花序に二つから五つぐらいの花をつけ、細い柄

ノカイドウ自生地見取り図



ノカイドウ



霧島山とミヤマキリシマ

に白色微紅彩の美しい花びらである。果実は径八ミリメートルぐらいの球形で、黄褐色をしている。ノカイドウの自生地を見取り図で図示すれば前掲のとおりである。

その他の有名植物

大幡池東北ろくのヒノキの天然林、白鳥温泉付近のツチトリモチの群落、新燃岳のキヨスミウツボの群落など、いずれも珍しいものである。霧島の名を冠された植物には、ミヤマキリシマ・キリシマシヤクジョウ・キリシマエビネ・キリシマミズキ・キリシマノガリヤスなどがある。

4 南霧島の植物

南霧島は、霧島・牧園の両町を指し、その面積は約七〇〇〇ヘクタールで、霧島屋久国立公園、霧島団地の約三五パーセントを占める。その植物の概要は次のようである。

きく科Ⅱノゲシ・フクオウソウ・ツルニガナ・ヤクシソウ・ノアザミ・キッコウハグマ・テイシヨウソウ・セシボンヤリ・ヤマアザミ・ハンカイソウ・ツワブキ・ヨモギ・オトコヨモギ・カワラヨモギ・オニタビラコ・ホソバアキノノゲシ・ミヤマアキノノゲシ・オオヤマボクチ・オニアザミ・ノブキ・タカサブロウ・メナモミ・オナモミ・ガントクビソウ・サジガントクビソウ・ヒメガントクビソウ・ハハコグサ・ヤマハハコ・ヒメムカシヨモギ・ヨメナ・ヤマシロギク・ヒナギク・シュウブソウ・アキノキリンソウ・ヒヨドリバナ・スマダイコン・フジバカマ・ヒメジョオン・ベニバラ・ボロギク・シュウメイギク。ききょう科Ⅱキキョウ。

うり科Ⅱカラスウリ・キカラスウリ。

おみなえし科Ⅱオミナエシ・オトコエシ。

すいかずら科Ⅱハコネウツギ・スイカズラ・ウグイスカグラ・キダチニンドウ・キバナコックバネウツギ・ガ

マズミ・ミヤマガマズミ・オトコヨウゾメ・ミヤマシグ
レ・ムシカリ・サンゴジュ・ニワトコ・ソクズ。

あかね科Ⅱアカネ・ハクチヨウゲ・クチナシ・ヤエム
グラ・ヨツバムグラ・ヤマムグラ・ツルアリドオシ・ヘ
クソカズラ・イナモリソウ・シロバナイナモリソウ・サ
ツマイナモリソウ・カギカズラ。

おおばこ科Ⅱオオバコ。

きつねのまご科Ⅱキツネノマゴ。

いわたばこ科Ⅱイワタバコ。

はまうつぼ科Ⅱナンバンギセル。

ごまのはぐさ科Ⅱシオガマギク・イヌフグリ・ミヤマ
クワガタ・クワガタソウ・アゼナ・ヒメトラノオ。

なす科Ⅱイヌホオズキ・ハダカホオズキ・ヤマホオズ
キ・センナリホオズキ・クロ。

くちびるばな科Ⅱヤマハツカ・ヒキオコシ・ヤマジソ・
ヒメジソ・アキノタムラソウ・シソバタツナミ・キラン
ソウ。

くまつづら科Ⅱハマクサギ・クサギ・ムラサキシキブ・
ヤブムラサキ。

むらさき科Ⅱムラサキ・チシャノキ。

ひるがお科Ⅱヒルガオ。

かがいも科Ⅱキジョラン。

きょうちくとう科Ⅱテイカカズラ。

りんどう科Ⅱセンブリ・ムラサキセンブリ・アケボノ
ソウ・ツルリンドウ・リンドウ・フデリンドウ・ハルリ
ンドウ・オヤマリンドウ。

ふじうつぎ科Ⅱホウライカズラ。

ひいらぎ科Ⅱモクセイ・キンモクセイ・ネズミモチ・
トネリコ。

えごのき科Ⅱエゴノキ・コハクウンボク。

はいのき科Ⅱタンナサワフタギ・クロバイ・ハイノ
キ・ミミズバイ・クロキ。

かきのき科Ⅱヤマガキ・シナノガキ・トキワガキ。

さくらそう科Ⅱオカトラノオ・コナスビ。

やぶこうじ科Ⅱヤブコウジ・ツルコウジ・マンリヨ
ウ・カラタチバナ・イズセリヨウ。

つつじ科Ⅱシャヤンボ・アシバ・アセビ・ネジキ・
ベニドウダン・ヒカゲツツジ・ミツバツツジ・コパノミ
ツバツツジ・ヤマツツジ・ミヤマキリシマ。

いちやくそう科Ⅱイチヤクソウ。

いわうめ科Ⅱヒメイワカガミ。

りょうぶ科Ⅱリョウブ。

みづき科Ⅱアオキ・ハナイカダ・ミズキ・ヤマボウ

シ・クマノミズキ。

からかさばな科Ⅱノダケ・ミツバ・ミツバゼリ・ミシ

マサイコ・ウマノミツバ・チドメグサ・オオチドメグサ。

うこぎ科Ⅱウド・タラノキ・カクレミノ・ハリギリ・

コシアブラ・タカノツメ・ヤマウコギ・ヤツデ。

ありのとうぐさ科Ⅱアリノトウ。

あかばな科Ⅱオオマツヨイグサ。

みそはぎ科Ⅱサルスベリ。

ぐみ科Ⅱアキグミ・ナワシログミ・ツルグミ。

じんちようげ科Ⅱミツマタ・コガンビ・キガンビ・コ

シヨウノキ・ジンチヨウゲ。

きぶし科Ⅱキブシ。

くすどいげ科Ⅱイイギリ。

すみれ科Ⅱタチツボスミレ・ミヤマスミレ・シハイス

ミレ・ヒメミヤマスミレ・スミレ・エイザンスミレ。

おとぎりそう科Ⅱオトギリソウ・ヒメオトギリソウ・

アゼオトギリソウ。

つばき科Ⅱヒサカキ・ハマヒサカキ・サカキ・モツコ

ク・ヒメシヤラ・ナツツバキ・サザンカ・ヤブツバキ。

さるなし科Ⅱサルナシ・マタタビ。

あおぎり科Ⅱアオギリ。

ぶどう科Ⅱノブドウ・ウドカズラ・ツタ・エビザル・

サンカクヅル・ヤブガラシ。

くろうめもどき科Ⅱイソノキ・クマヤナギ・ミヤマク

マヤナギ・ネコノチチ。

あおかざら科Ⅱアワブキノキ・ヤマビワ。

かえで科Ⅱヤマモミジ・ハウチワカエデ・コハウチワ

カエデ・コミネカエデ・ウリハダカエデ・エンコウカエ

デ。

みつばうつぎ科Ⅱゴンズイ。

にしきぎ科Ⅱクロズル・ツルウメモドキ・マユミ・コ

マユミ・ニシキギ・マサキ・ツルマサキ・ツリバナ。

もちのき科Ⅱモチノキ・クロガネモチ・アオハダ・ソ

ヨゴ・タラヨウ・イヌツゲ。

はぜのき科Ⅱヤマハゼ・ツタウルシ・スルデ。

とうだいぐさ科Ⅱシラキ・アカメガシワ・ユズリハ・

ヒメユズリハ・ナツトウダイ・エノキグサ・コミカンソ

ウ。

せんだん科Ⅱセンダン・シンジュ・ニガキ。

まつかぜそう科Ⅱユズ・カラタチ・ミヤマシキミ・キハダ・イスザンシヨウ・カラスノサンシヨウ・フユザンシヨウ・マツカゼソウ・サンシヨウ。

ふうろそう科Ⅱゲンノシヨウコ。

かたばみ科Ⅱカタバミ。

まめ科Ⅱクズ・キツネノササゲ・ヒメクズ・ミヤマトベラ・ヤマフジ・エンジュ・フジキ・ジャケツイバラ・ハナズオウ・ネムノキ・メドハギ・スズメノエンドウ・ヤハズソウ・ネコハギ・タヌキマメ・カワラゲツケイ。

いばら科Ⅱウメ・スモモ・ユスラウメ・ミヤマザクラ・ソメイヨシノ・ヤマザクラ・オオシマザクラ・ミネザクラ・リンボク・ノイバラ・テリハノイバラ・モミジイチゴ・クマイチゴ・ナワシロイチゴ・フユイチゴ・ヤマブキ・ボケ・ワレモコウ・キンミズヒキ・ヘビイチゴ・ダイコンソウ・キシムシロ・ミツバツチグリ・クサボケ・ウラジロノキ・ナナカマド・ウシコロシ・コデマリ。

まんさく科Ⅱマンサク・イスノキ・トサミズキ。

ゆきのした科Ⅱヤシヤビシヤク・イワカガミ・アジサイ・ガクウツギ・ノリウツギ・マルハウツギ・ウメバチソウ・ミヤマネコノメソウ・ダイモンジソウ・ジンジソウ・トリアシシヨウマ。

けし科Ⅱタケニグサ・ムラサキケマン。

くすのき科Ⅱシロモジ・クロモジ・カナクギノキ・コガノキ・バリバリノキ・シロダモ・イスガシ・タブノキ・ホソバタブ・クスノキ・ヤブニツケイ・アオモジ。もくれん科Ⅱマツブサ・シキミ・オガタマノキ・コブシ・モクレン・ホオノキ・オオヤマレンゲ・タイサンボク。

つづらふじ科Ⅱツツラフジ・カミエビ。

へびのぼらず科Ⅱナンテン・ヒイラギナンテン・メギ。

あけび科Ⅱムベ・アケビ・ミツバアケビ。

きつねのぼたん科Ⅱボタンヅル・モミジカラマツ・オキナグサ・トリカブト・シヤクヤク・ボタン。

やまぐるま科Ⅱヤマグルマ。

なでしこ科Ⅱカワラナデシコ・ハコベ。

すべりひゆ科Ⅱスベリヒユ。

ひゆ科Ⅱセンニチソウ・イノコズチ・ヒユ・イスビ

ユ・オオビユ。

たて科Ⅱヤブタデ・オオイスタデ・ミゾソバ・ミズヒキ・イタドリ・スイバイヌタデ・アキノウナギツカミ。やどりぎ科Ⅱヒノキバヤドリギ・ヤドリギ・オオバヤドリギ。

いらくさ科Ⅱヤブマオ・オニヤブマオ・コアカソ・イワガネ・ミズナ・トキホコリ。

くわ科Ⅱイスビワ・イチジク・コウゾ・ツルコウゾ・クワ。

にれ科Ⅱエノキ・ケヤキ・ムクノキ・ハルニレ・アキニレ。

ぶな科Ⅱマテバシイ・シリブカガシ・イタジイ・ツブラジイ・クロカシ・ハハソ・アカガシ・ウラジロガシ・イチイガシ・ミズナラ・クスギ・カシワ・クリ・イスブナ。

かばのき科Ⅱヤマハンノキ・ヤシヤブシ・ヒメヤシヤブシ・ミズメ・イヌシデ・アカシデ・クマシデ。

やまもも科Ⅱヤマモモ。

やなぎ科Ⅱカワヤナギ・ヤマネコヤナギ。

せりりょう科Ⅱセンリョウ。

はんげしょう科Ⅱドクダミ。

らん科Ⅱカヤラン・ナゴラン・フウラン・ホグロ・カシラン・オサラン・セキコク・エビネ・ミヤマウズラ・アケボノシユスラン・オオバノトンボソウ・ジンバイ・アオチドリ・クマガイソウ・サイハイラン。

たんどく科Ⅱハナカンナ。

しょうが科Ⅱミョウガ・ハナミョウガ。

あやめ科Ⅱアヤメ・カキツバタ・イチハツ・キシヨウブ。

ひがんな科Ⅱヒガンバナ・スイセン・キズイセン・ハマオモト。

やまいも科Ⅱヤマノイモ・トコロ・カエデドコロ。

ゆり科Ⅱサルトリイバラ・ネバリノギラン・オオパジヤノヒゲヤブラン・ヒメヤブラン・バラン・オモト・ホウチャクソウ・ナルコユリ・マイヅルソウ・ウバユリ・オニユリ・ノビル・ヤマラッキョウ・ノカンゾウ・ギボウシ・ヤマジノホトトギス・シヨウジョウバカマ・ノギラン。

つゆくさ科Ⅱツユクサ。

やし科Ⅱシユロ。

はもの科Ⅱシカクダケ・ナリヒラダケ・オカメザサ・
 メダケ・ネザサ・マダケ・ホテイチク・モウソウチク・
 ハチク・ホウライチク・ハトムギ・チガヤ・アシボソ・
 トキワススキ・コブナグサ・シバ・ナルコヒエ・カリマ
 タガヤ・スズメノヒエ・チヂミザサ・スカキビ・スヒシ
 バ・キンエノコロ・チカラシバ・スズメノテッポウ・ネ
 ズミノオ・ササクサ・ギョウギシバ・ヤマカモジグサ・
 メガルガヤ・オガルガヤ・ススキ。

さじおもだか科Ⅱアキナシ。

がま科Ⅱガマ。

ひのき科Ⅱハイビヤクシン・ミヤマビヤクシン・ヒノ
 キ・サワラ・ヒムロ・アスナロ・コノテガシワ。

すぎ科Ⅱコウヨウサン・スギ・エンコウスギ・コウヤ
 マキ。

まつ科Ⅱアカマツ・クロマツ・ヒマラヤスギ・カラマ
 ツ・モミ・ツガ・トウヒ・ハリモミ。

いぬがや科Ⅱイヌガヤ・チョウセンガヤ・ラカンマ
 キ・イスマキ。

いちい科Ⅱカヤ・イチイ。

うらほし科Ⅱマメヅタ・ヒトツバ・ノキシノブ・ミツ

デウラボシ・クリハラン・ワラビ・イノモトソウ・アマ
 クサシダ・タチシノブ・シシガシラ・ヒノキシダ・ホラ
 シノブ・ジュウモンジシダ・ヤブソテツ・コケシノブ・
 ウチワゴケ・ウラジロ・コシダ・ツルシノブ・ゼンマ
 イ・コモチシダ。

いわひば科Ⅱイワヒバ。

ひかげのかずら科Ⅱトウゲシバ・ヒカゲノカズラ・マ
 シネンスギ・スズラン・ヒモラン。

とくさ科Ⅱスギナ。

こけ類Ⅱスギゴケ・ムクムクチリメンゴケ・ウチワチ
 ヨウチンゴケ・ミズゴケ・オオシツボゴケ・ゼニゴケ。

うめのきごけ科Ⅱウメノキゴケ。

さるおがせ科Ⅱサルオガセ。

くちべにたけ科Ⅱクチグリ。

きつねのちやぶくろ科Ⅱノウタケ。

かごたけ科Ⅱカゴタケ。

まつたけ科Ⅱベニテンダケ・テンダケ・マツタ
 ケ・モミタケ・エノキタケ・ヒラタケ・ツキヨタケ・シ

イタケ・シメジ・ハツタケ・ツチカブリ。

さるのこしかけ科Ⅱマイタケ・マンネンダケ。

こうたけ科Ⅱコウタケ・ヤマブシダケ・ホウキダケ。
きくらげ科Ⅱキクラゲ。

い科Ⅱイトイ。

さといも科Ⅱマムシグサ・ウラシマソウ・ヒロハテン
ナンショウ。

二 動物

この公園一帯は、森林や湖沼や暖流に恵まれているため、鳥獣や昆虫などの生息が多く、代表的な熱帯候鳥といわれるブッポウソウや、八色鳥もここで巣をつくる。

この地帯が温帯の南限に当たっているため、北方・南方両系のものが多く生息している。

1 哺乳類

キウシュウシカ・イノシシ・ノウサギ・ムササビ・タヌキ・ムジナ・イタチ、その他ごく少数ではあるが、日本猿も生息する。特にイノシシは多く、雨上がりの登山道路付近で、彼らの踏み荒らした跡がよくみられる。シカは中岳・新燃岳からえびの高原一帯にかけて多く、えびの高原では、日暮れ時に宿舍の窓からシカの姿が望

見されるといふ。猿も山ろく地帯では時々みかける。

2 鳥類

山ろく地帯には、キジ・ヤマドリ・コジュケイ・カラス・ヒヨドリ・ツグミ・シジュウカラなどが多い。また、山中には、コシロヤマドリ・カケスなど留鳥のほか、ウグイス・カッコウ・トラツグミ・アカシヨウビン・ヤマセミなどの夏鳥や、フクロウ・ミミズク・タカなどもある。珍奇なものとして、八色鳥や、霧島神宮・狭野神社の老杉の空洞で繁殖するといわれる「姿の仏法僧」ミヤガラスがいる。この鳥は、ギヤアとかゲッゲツと鳴く。

しかし、霧島にも声のブッポウソウも確かにいる。昭和十五年ころの五月中旬、新湯付近で、やや薄暗くなつた七時半ころ、ブッポウソウ、ブッポウソウ、と二声だけ聞いたという。しかし、姿はみえなかった。永い間、声の正体はわからなかったが、山梨県の野鳥研究家・中村幸雄が、フクロウ科の一種で、コノハズクという鳥であることを発見し、学界でもそのように認められた。神秘のベールがはがれ、NHKが身延山でコノハズクの現地放送をして、人気を呼んだのもこのころであつた。コノ

ハズクとミヤガラスは、共に南方系の渡り鳥といわれ、生息場所も同じであるところから、古くから混同されたのではなからうか。

普通、ブッポウソウといわれる鳥は、東南アジア一带にすむ渡り鳥で、日本には五月ごろ飛来し、本州・四国・九州の山間部にすみ、九月ごろになると、ビルマ・フィリピン・インドシナ方面に帰っていく。この鳥は、警戒心が強く、一〇メートル以上の大木の幹に穴をあけ、普通つがいですみ、五月下旬から六月中旬にかけて巣をつくり、三〜四個の卵を産み、ひなをかえす。エサは、トンボ・セミ・コガネムシなどである。繁殖期には、巣をつくる場所の争奪戦で、仲間同士殺し合うことも多いという。生息場所は主として霧島神宮から狭野神社付近であるが、五、六月ごろには、霧島温泉付近まで飛来することも往々ある。

なお、冬季静かな火口湖には、マガモ・コガモ・オシドリなどが遊泳している光景もみられる。

3 魚 類

湖沼はすべて火口湖であって、ほとんど流入・流出する河川がないから、魚類は割合に少なく、大浪池には、

昔放流したコイ・フナが、御池には、アブラバエとコイなどが生息している。

4 昆 虫 類

南北両系のものが混生しているために、興味深いものがある。特に珍しいものは、キリシマミドリシジミチョウ・サツマシジミチョウ・モンキアゲハ・ムカシヤンマ・オオダイセコガネなど。特に高千穂峯山頂付近は、気流の関係からか豊富な昆虫相を示している。

三 気 象

霧が多いから霧島といわれるほど霧の発生が多く、頂上にはほとんど霧がかかっている。したがって、年間の降雨量は平均二〇〇〇ミリメートルを超え、夏季の七月は、一か月のうち二〇日間は雨である。天気がよいのは、春と秋で、なかでも十月、十一月は快晴の日が続く。さすが南国だけに雪は少なく、降雪は一月に多い。霧島温泉付近では、一、二月に数回、大浪池付近では十二月から三月にかけて、月に一〇日以上は降雪日を見る。このころになると、大浪池・韓国岳付近は、水滴が非

常に冷たい空気にふれて冷却したうえに、雪片と混じて樹木や岩石に付着し、同時に空中の水蒸気が昇華作用を起こして、表面に美しい結晶をつくり、白珊瑚さんごのような霧水の花園となる。

平均気温は、霧島温泉付近で七、八月の二二度から二五度を最高とし、一、二月の〇度が最低となっている。年間における最高気温は、三〇度に達することは珍しく、夏は涼しいから避暑客でにぎわう。

四 観光資源

(一) 主要山岳・高原

1 御鉢（標高一四〇八メートル、火口底一一六八メートル）

山体は欠頂円錐すい型のすりばち型で、火口の様子が、飯びつのようなかっこうをしているので、御鉢というようになったのであろうか。火口の直径は約五〇〇メートル、深さは約二〇〇メートルに及ぶ大噴火口があり、今なお、かすかに白いガスが立ち昇るのがみられる。霧島

火口中最後まで噴火を続けた火山で、大正二年十一月から、翌年一月にかけて活動したが、桜島の大噴火とともに衰えた。美しい円錐状をなし、高千穂峯の寄生火山である。円錐丘の外側は急な斜面で、全山火山岩に覆われているため、植物はみるべきものがなかったが、最近山ろくから頂上に向けて松・ミヤマキリシマなどの植生がみられるようになった。

内面の壁は、整然と熔岩ばいがんの層を表し、成層火山であることがわかる。昔から新燃岳と交互に活動する傾向があったようである。雨のあと火口の底には水をたたえ、これが太陽の光を受けて、五色に輝くさまは実にきれいだある。

高千穂登山道は、北側火口壁上を約一キロメートル通過するが、ここは馬の背越えといわれる險路であって、橋南溪の『西遊記』にも書かれている。幅二、三メートルもあるうか、右も左も際涯も知れぬ絶壁上の道で、風の強い日などの登山は容易ではない。この御鉢と、高千穂峯の接する鞍部は、背門せもん丘と呼ばれ、霧島神宮が最初に創建された場所と伝えられている。

2 高千穂峯（標高一五七四メートル）

霧島火山群の東南端に位置し、ピラミッド型コニーデ（尖頭円錐型）の端正な山容を誇っている。「馬の背越え」をたどり終え、高千穂峯へかかる間に、一つの浅い谷がある。「千里が谷」とか、「天の河原」とか呼んでいるが、正しくは「背門丘」といって、約一四〇〇年前、霧島神宮が建立されたところだといわれている。古くは、瀬多尾権現宮（霧島神宮の前身）があったところであり、御鉢の噴火のため、ふもとの方に遷座されたと伝えられている。

瓊々杵尊が、この峰に降臨されたという伝説は著名で、山頂は「天の逆鉾峰」とも「最初の峰」とも呼ばれる。東に二つ石、西に御鉢の寄生火山を持ち、標高一三〇〇メートル以下は、三者合体して広いすそ野を展開していて、その成因にも、噴火口の南の半分が崩れ落ちた残体であるという説と、コニーデの山体の上に、トロイデ状に熔岩を盛り上げたものであるとする説の二説がある。ともかく植生は極めて新しく、マイヅルソウ・イタドリ・トリアシシヨウマ・ヤシャブシ・ミヤマキリシマなどが生育するほか、火山礫が大部分を占め、放射谷が山肌を刻み、これが四季折々の光線に照り映えて、種々

な色彩に染められ、霧島火山群中第一の秀麗な山容とともに、神秘的な美しさを誇っている。

山頂には、気流が影響して、昆虫類が特に多いことも興味の対象である。また、頂上には火口がなく、狭いがやや平坦になった場所がある。登山客が多く、特に元旦の夜明け、この山頂から御来光を仰ぐ行事が続けられ、数多くの人が登っている。また、最近ではミヤマキリシマの開花時などにも登山者が多い。

3 二つ石（標高一三〇〇メートル）

旧火口壁の面が残ったものであるといわれる。山頂の東端に、その名の起源となった二つの巨岩がそびえている。脚下に御池や小池の名鏡と、これを包む広大な常緑照葉樹の樹海は特にみごとである。

4 中岳（標高一三四五メートル）

御鉢の北西に位置し、トロイデ型火山で、つりがね状をしている。山頂には、なだらかな噴火口があり、一部は湿原となっている。高千穂河原から西へ登る。霧島火山中でも新しい火山といわれ、高千穂河原に面した南部は、熔岩が露出し、その上部に、標高一二〇メートルの熔岩が舌状に派出している。山頂から山腹にかけて、

ミヤマキリシマ群落が著しく、新燃岳とともに、山中第一の美観を呈する。そのほかに、ヤシヤブシ・ツクバネウツギ・ウメバチソウ・ススキ・ツクシヒゴダイなどがみられ、観賞地として最適である。登山が容易なので、特にツツジの開花時など登山客でにぎわう。

5 新燃岳（標高一四二〇・八メートル、湖面標高一二三九メートル）

中岳の北西に位置し、欠頂円錐型のホマーテ型火山。頂上には、完全に近い円形の、直径七五〇メートルの火口があり、そこから、一八〇メートル下った火口底には、直径一五〇メートル、深さ約一メートルの火口湖があり、青緑色の水をたたえている。また、火口の南部周壁には、「兎の耳」と呼ばれる熔岩突起が二つあり、遠くからの眺望では、ちょうどラクダの背のこぶのようにもみえる。中腹は灌木に、山頂は草原に包まれていて、山頂から山腹にかけて、ミヤマキリシマの分布が著しく、山頂のものは、気象的な影響から矮化して、地に敷きつめたように、一面にきれいな花をつけて、とてもみごとである。開花時など、登山客の絶え間がない。また、山腹の南西側にはミツバツツジの群落があり、これ

も開花時は、みごとなものである。

昭和三十四年二月十七日、南西部外壁と内壁から突如噴火を起こし、ミヤマキリシマも相当の被害を受けた。現在でも、山頂外壁と内壁から、わずかながらガス状の噴煙の上がるのがみられる。この火山も、中岳と同じく霧島火山群中、最も新しい火山である。

6 夷守岳（標高一三四四メートル）

宮崎県側にあり、霧島火山群の東北端に位し、コニーデ型の端正な山容を示しており、山群中の名山の一つとされている。山頂には、クマザサ・ススキが密生しているが、山腹から山ろくにかけて放射谷が発達し、大森林に覆われ、特に西北側のふもとには、クロマツを主とする珍しい森林が展開している。小林方面からみた濃い緑の円錐形の姿が美しい。「真幸の名山」として、古来評判をとった山である。山容が美しいだけに、登るには難渋な山とされている。『日本書紀』の景行天皇の条に、筑紫の国を巡狩せられた時、夷守にやってこられたと記されている。

7 獅子戸岳（標高一四二八・四メートル）

新燃岳と韓国岳の中間に位置し、熔岩や火山砂礫が露

出しているところから、またの名を赤崩れともいう。火口は既に破壊浸食され、灌木が密生しているが、一帯にミヤマクリシマの分布が多く、それに、ヒカゲツツジが点在して佳景である。ミヤマクリシマの原生地ともいわれている。この獅子戸岳と新燃岳、それに大幡山に囲まれた草原は、殿様まぶしと呼ばれ、昔島津氏が狩猟を行つたところだと伝えられている。

8 韓国岳（標高一七〇〇・三メートル、火口底一三九八メートル）

相当老年の山で、地質学上、旧霧島熔岩に属しており、霧島火山群中の最高峰である。ちょうど、えびの岳と白鳥山と大浪池火山のすそ野を合わせたところに当たっている。西北部を除いては、柔らかみのある円頂の山容を示し、山頂には、直径九〇〇メートル、深さ三〇二メートルの火口がある。火口壁の西北部は爆破されて、今も凄惨な景観を呈し、火口内壁上部は絶壁、そこにも熔岩や火山砂礫の累層がみられる。また、下部は崩壊して、緩斜面となっており、火口底は雨期だけ水がたま

る。この山は、二つの爆裂火口をもっていて、一つは爆破

された火口壁の北方にあり、いま一つは、東南山腹の琵琶池がそれで、この池は形が楽器の琵琶に似ているところから、この名が起こつたものである。時により、池の水が枯渇することがないとも限らない。山頂部には、ミヤマクリシマの群落のほか、マイヅルソウ・ススキ・ツクシヒゴダイ・ツクシゼリ・トリアシシヨウマなどが生育し、火口壁にはヤシャブシ・ヒカゲツツジ・シロドウダン・イワカガミなどがみられる。また、大浪池からの登山路に沿った山腹は、標高の割合に森林の生育がよく、ハリモミ・ブナ・ミズナラ・クヌギなどが多く、植物の垂直の分布を、ふもとの方から上に、段々とみることができる。すなわち、下の方から、喬木の森林帯、灌木帯、草本帯となっている。

冬季十二月上旬から三月下旬にかけて、霧氷の美しさも特筆されてよいであろう。なにしろ、霧島の最高峰であるから、山腹の眺望は雄大広闊で、火口や火口湖に富む霧島火山群を見下ろす眺めや、桜島や高隈山・開聞岳、さては遠く波かとはかりに重なりあう中部九州の山々の展望は、なるほど韓国まで見通せるという意味から、山の名称をつけた故人の機知もしのばれる。よく、写真など

にとってあるのは、この山頂から、新燃岳を前景にして、御鉢・高千穂峯をみた光景である。韓国の見岳の略で、皇孫がはるかに韓国を望見されたという伝えがある。もちろん韓国がみえる道理はない。山岳熱の盛んな折から、最近登山客も多く、西北に当たるえびの高原からの登山が容易である。

9 大浪池（標高一四一一・九メートル、湖面一二三九メートル）

韓国岳の南に位置し、その東ふもとが、霧島町と牧園町の境をなす。頂上に直径一キロメートルの火口があり、約一七〇メートル下った火口底に、直径六三〇メートルの火口湖を有し、なみなみと紺青の水をたたえている。霧島林田温泉口から登山するのが普通であったが、昭和三十六年十一月に、道路公団による南北霧島道路を結ぶスカイラインが開通し、霧島温泉とえびの高原を結んでいるので、現在は七合目付近までバスで行ける。バス停から約四〇分で火口壁に到達し、湖面を望見することができ。なお、池に伝わる伝説もあるが、池については、湖沼の項でふれたい。

10 硫黄山（標高一三二〇メートル）

宮崎県側えびのにある。韓国岳の西方えびの高原にあり、えびの高原からは、登るといふほどの山ではなく、高さ五〇メートルぐらいの台地といった方がよい。山の半面が黄色の硫黄の華で彩られ、硫化水素や、亜硫酸ガスを盛んに噴出している。かつて硫黄を採取し、近くに精錬所もあったが、現在では採取していない。この山は、通称「賽の河原」といわれ、一面に小石を積んで、仏教にいう三途の川「賽の河原」をしのばせている。

11 烏帽子岳（標高九八七・九メートル）

霧島神宮から霧島温泉へ通ずる国道の右手にあり、この道路はその中腹を走っていることになる。一面森林に覆われている。その山容は、この地方でいうヨボシ、つまり鶏冠に似ているところから、この名がつけられたといわれる。頂上は、火口の跡も明らかでなく、旧態を失った古い火山で、その余勢が湯之野温泉・湯之谷温泉などに現れており、森林のすそは一面の草原で、その山腹を霧島神宮・霧島温泉間の国道が走っている。霧島を訪れる人々に利用され親しまれている。

12 大幡山（標高一三五二・五メートル）

霧島火山群中、唯一の複式火山で、直径約一〇〇メー

トル、外輪山はほとんど破壊されて低く、中央火口丘も平坦になって、すこぶる複雑な地形を示している。旧火口は湿原となり、モウセンゴケやマイヅルソウ・ツクシヒゴダイなどがみられ、山頂一帯は草原状で、この辺にもミヤマキリシマの群落のほか、ススキ・ヤシヤブシ・ツクバネウツギ・アキノキリンソウ・イタドリなどが目立つ。

13 矢岳やだけ（標高一三三一・六メートル）・竜王岳りゅうおうだけ（標高一一六〇メートル）

新燃岳の東方にそびえる火山で、全山密林に覆われ、竜王岳の南ふもとの溪流沿いに、立木炭化の遺跡がみられる。これは、立木が熱い火山砂礫れきによって、埋没されて炭化したもので、激しかった噴火当時を想像するのによい材料であろう。

14 丸岡山まるおか（標高一三三〇メートル）

大幡池に続く円丘状の火山で、火口は浅く、矮化わいした灌木や草木に包まれ、ミヤマキリシマ・クマザサ・ススキが密生している。ここで自慢のヒノキ天然林は丸岡山の東山ろく、標高一〇〇〇メートルの等高線を中心に、面積六ヘクタールの地域で、ヒノキ・モミ・ツガ・アカ

マツなどが混生しているところもあり、ヒノキの樹齢はだいたい一〇〇年から三〇〇年といわれ、直径二〇センチメートルから一メートルに達している。南九州にこの種の天然林が存することは、学術上たいへん興味ある現象で、大正十年（一九二一）十月、学術参考林に指定された。

15 白鳥山しらとり（標高一三六三メートル）

山頂は、延々とした原野となっており、山体は複雑で、北側に二つの爆裂火口がある。北部の山腹は放射谷が発達し、モミ・ツガを主要林とする美林に覆われており、山頂の東南部にビヤクシ池、東に六観音池がある。

16 甕岳かま（標高一三〇一メートル）

欠頂円錐型の火山で、山頂には、直径五〇〇メートルの浅い皿状の火口があつて、水をたたえた湿原となつており、美しい池塘いもやうもあつて、ミズゴケ・モウセンゴケ・ツクシゼリなどがみられ、また、山頂部は原野で、ミヤマキリシマ・イヌツゲ・ヤシヤブシ・シロドウダシ・ヤマアザミ・マイヅルソウなどが混生している。

17 えびの岳えびのだけ（標高一二九三メートル）

火口の東北部が崩れて、えびの高原に向かって馬蹄ばてい型

に開いていて、ちょうど天然の野外劇場のような地形を示している。山頂の火口内にも、草木、灌木類が生い茂っている。

18 佐賀利山（標高七六三・四メートル）

山体の大部分が、近くにあるえびの岳の熔岩流に埋められてしまった低い山で、山頂部は、樹林に覆われている。

19 栗野岳（標高一〇九四・二メートル）

浸食によって、ほとんど旧態をとどめていないが、本公園の西北端に堂々とした山容を誇る。同じく山頂までぎっしりと樹林に覆われ、北ふもとには天然記念物ヒガンザクラの自生南限地がある。

20 高千穂河原

御鉢の西、山腹の火山砂礫が押し出して造った扇状地で、鹿児島県が建設した野営場や水道、茶店などがあり、霧島温泉・高千穂峯・中岳・新燃岳などを結ぶ要衝に当たる。また、ここに霧島神宮古宮跡として、古式ののっとった祭場がある。昭和五十六年から国立公園の施設管理と清掃を担当する美化管理財団高千穂河原支部も設けられている。

21 えびの高原

韓国岳の西ふもと、飯岳・白鳥山・えびの岳などに囲まれた海拔一二〇〇メートルの広闊な高原で、ススキ・ノリウツギ・ミヤマキリシマ・ネザサ・ノアザミなどが多く、西部はアカマツ林に覆われており、高原南部の宮崎・鹿児島両県地帯の細流に沿って、天然記念物のノカイドウが自生している。海棠（かいどう）の原種で、高さ二メートルから五メートルの小喬木状となり、五月初旬ごろ、五弁で淡紅白色の花が咲く。それからカサ湯（硫黄泉）・川湯（みょうばん泉）などの野趣に満ちた温泉もあり、市営キャンプ場や山小屋の施設、ホテル、バスターミナル、ビジターセンター、駐車場などが完備され、韓国岳などの登山口でもある。

(二) 湖 沼

俗に霧島四十八池といつて、山岳に似合わぬたくさんの、小ささまざまな湖沼を有している。そのほとんどが火口湖である。

1 大浪池（標高一四一一・九メートル、湖面一二三九メートル）

霧島火山群のうちで、また、火山国日本のうちでさえ、この大浪池ほど整った形の火口湖は他にみられないとは、一度この地を訪れた人々が、異口同音にもらす観賞の言葉である。すなわち、山頂の火口は直径一キロメートルもある正円形で、約一七〇メートル下った火口底に、直径六三〇メートル、水深一一・六メートルの火口湖があり、紺青の水をなみなみとたたえている。火口壁の上部は安山岩の絶壁で、下部は崩れた岩層が緩傾斜を示しており、しかも火口には、樹木がうつそうと茂り、モミ・ツガ・ハリモミなど針葉樹のほかに、ヤシヤブシ・ミズナラ・オオカメノキ・ヤマハンノキ・ヒカゲツツジなどが混生して、いずれも清澄な湖面に影を映し、まさに神秘的な景観を織りなしている。火口外周は、ミヤマキリシマ・ノリウツギ・ヤシヤブシなどの低い灌木と、ススキ・マイヅルソウ・ヤマアザミ・リンドウなどの草原で、ここから霧島温泉に下る登山路の両側は、そのまま植物生態の観察ルートであり、特に標高一一〇〇メートル付近の霧島特有の肌の赤いアカマツや、更に霧島温泉に近い常緑照葉樹林は、みごとであるから見逃してはならない。また、大浪池は、一月から二月にかけて

結氷し、氷厚二〇センチメートルを超えるので、えびの白紫池が、スケート場として指定されるまでは、日本最南端の、天然のスケートリンクとなり、付近の霧氷とともに、ウインタースポーツ愛好家の寵児となっていた。大浪池に登るには、スカイラインの大浪池登山口でバスを降り、登山歩道を一・四キロメートル登れば、約四〇分から五〇分で池をみることが出来る。池には、コイ・フナなどもある。なお、大浪池にまつわる伝説もある。

2 御池（標高三七五メートル、湖面三〇五メートル）

霧島山は、火口湖の多いことでも有名であるが、御池は、その中の最大のもので、直径一キロメートル、周囲三キロメートル余り、水深一〇一・五メートル、火口壁は比較的低く、周囲一带は、常緑照葉樹林に囲まれる。そして、高千穂峯の秀峰が碧水に影を映しているのは、まことに特異の景観である。湖畔には、松の港・軀瀬港・皇子港・創崎港・苅茅港・柳港・護摩壇港の七港があり、春から秋にかけて、ボート、釣りの利用者が激増する。

しかし、湖棲生物は少なく、アブラバエ・イモリ・ス

ツボンのほか、アユ・コイ・フナ・ワカサギなどがい
る。夏は湖辺にキャンプ場も設営される。その昔、性空
上人が、護摩をたいて修行した跡と伝えられる護摩壇
は、この火口壁の中腹に沿った崖の上にあり、湖中でフ
ナが多いといわれる。霧島東神社からの眺望は格別美し
い。

3 大幡池 (標高一三〇六メートル、湖面一二三四メ ートル)

大幡山の東北に続く単独の火山で、山頂の火口湖は、
楕円形、周囲二キロメートル、水深一三・八メートル。
火口壁は低く、ススキ・ヤシヤブシ・クマザサ・ノリウ
ツギ・シロドウダンなどが生育していて、まことに明る
い山の湖水である。魚類の生息はなく、東北岸に排水口
を設け、小林市方面の灌漑用水に使用されている。ま
た、大幡温泉は、この池の東山腹にあって、古くは宇都
温泉とも呼ばれ、温度は二七度、アルカリ性炭酸泉であ
る。この湖は、四季ともに水量は増減しないといわれ、
昔、ふもとの農民が雨乞いにくれば、きつと効果があっ
たとい伝えられている。

4 六観音池 (標高一三〇五メートル、湖面一一九八

メートル)

えびの高原の北部にある火口湖で、別名六観音御池と
も呼ばれているが、直径四四〇メートル、水深一四・二
メートル、清澄な水をたたえ、池のほとりには、モミ・
ツガ・アカマツなどの老樹を配し、静寂な環境である。
北のほとりの六観音堂には牛馬の神が祭っており、その
参道の老杉は、屋久杉を植えたものと伝えられ、六観音
杉として有名である。昔、性空上人がこの池のほとり
で、看經苦行を続けていた時、日本武尊の化身が、白鳥
となって現れたという因縁で、白鳥権現を建てたといわ
れる。冬、結氷するので、スケートリンクになったこと
もある。現在では、一部がえびの高原の飲料水として使
用されている。

5 不動池 (標高一二五五メートル、湖面一二二八メ ートル)

えびの高原、硫黄山の北西、県道沿いにある火口湖で
直径二一〇メートル、水深九・三メートル、水質は、付
近の硫黄山の影響を受けて、強い酸性を含んでいる。現
在、えびののバスターミナルから小林市へ通ずる県道
が、池のほとりを通り、バスの車窓からその美しい光景

をみることができる。

6 白紫池びやうし（標高三六三メートル、湖面一二七二メートル）

えびの高原にあり、白鳥山直下の火口湖で、ビヤクシ池、又は白鳥池ともいい、直径二五〇メートル。火口壁は崩壊して、草木、灌木が茂り、水深は極めて浅く、湿原状を呈し、深い所で約五〇センチメートルから一メートルである。水位は一定していない。池の水は東側の流出口から、六観音池に注いでいる。冬季は、水深が浅いので、容易に結氷し、天然のスケートリンクとなり、利用者も多い。六観音池と同じく、えびの高原の飲料水として利用されている。

7 小池（湖面標高三九〇メートル）

御池の西方一キロメートルのところにあって、湖面は御池より八五メートル高く、大きさは直径三七〇メートル、水深一二メートル。火口壁が高く、常緑照葉樹の密林に覆われているので、不気味なほどの静けさを保っている。

(三) 滝

1 千里が滝

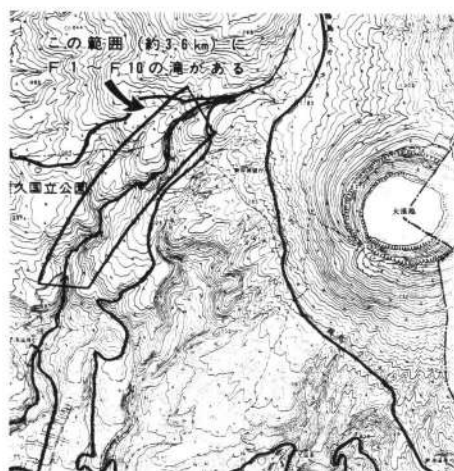
霧島山中の飛瀑ひばく中最高で、高さ七五メートル、昔から修験者の修道場として使われてきた。すぐ南に、霧島第二発電所がある。

2 両滝

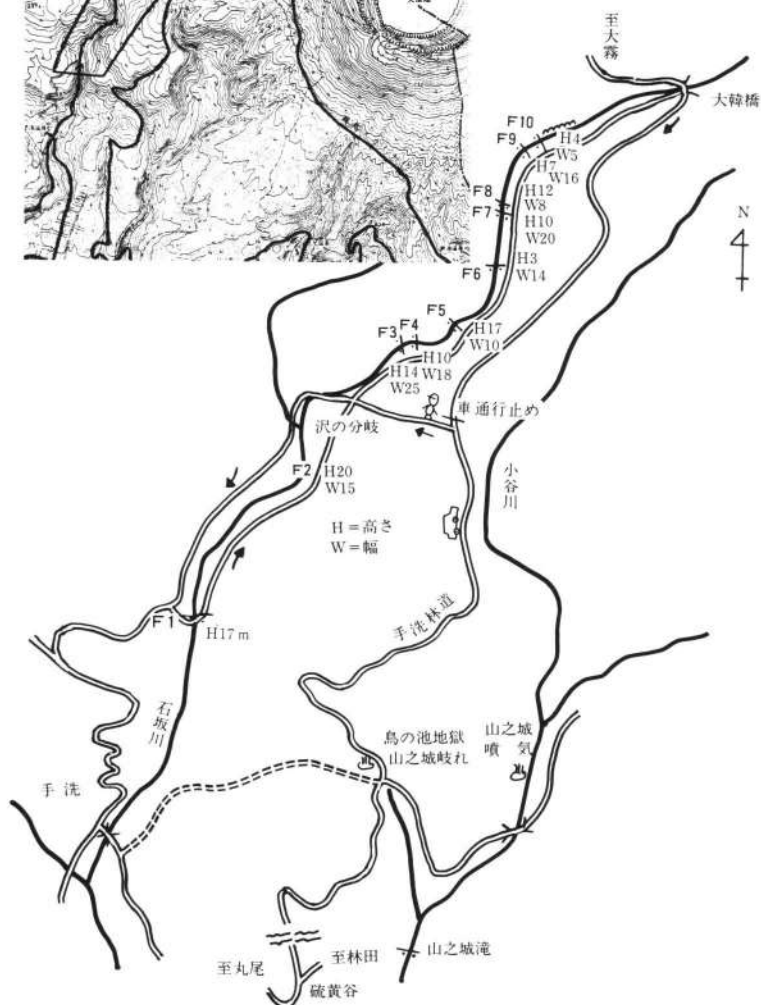
新湯から新燃岳ふもとに通ずる林道を、約二・五キロメートル登ったところにある。林道ができて、双方の滝が同時にみられるところから、この名で呼ばれている。ここの紅葉は、ほかにみられない美しさを持っている。

3 千滝

霧島神宮の西北約一キロメートルぐらいのところにある。高千穂河原から流れ出る小川が、霧島川に落ちる寸前、浸食作用による高さ四、五メートルに及ぶ大絶壁を流れ落ちる。現在この川は、平常水がなく、滝は、絶壁の中腹辺りから、地下水が絹糸のように繊細な糸状をなして、数十条も落ちて美しい。さながら、滝の白糸のようで、水芸をみる感じである。雨期になり、河原の水が多ければ、川に沿ってこの絶壁を一時に流れ落ち、二層



手洗地区まぼろしの滝10か所
(平成2年12月滝ウォッチングで発見される)



(「広報まきぞの」No. 368.平成3年1月号から)

の滝となり、その壮観はひとしおすばらしい。

4 丸尾 滝

丸尾温泉地区にあり、丸尾三差路から霧島神宮へ通ずる国道二二三号線を約二五〇メートル行つた左手にあって、豪壮華麗、そのしぶきと紅葉が映えあつて、こよなく美しい滝である。夜間照明施設も施され、水銀灯に照らし出された滝の美観は、例えようのない美しさを満喫することができる。

5 その他の滝

花房の滝・山之城の滝・手洗の滝などもあるが、交通不便のため、あまり世に知られていない。なお、犬飼の滝は、名所の項で紹介することとする。

轟木の滝は、寺原の「轟木の鼻」バス停の三差路を約五〇〇メートル行くとみられる。小谷川の中流の溪谷からの瀑布はすばらしい景観であり、土地の人たちの手で周辺も整備された。



お湯の滝（丸尾滝）

五 霧島に関する詩歌

有明の月は冴えつゝ霧島の

やまの溪間に霧たちわたる

若山牧水

見おるせば、霧島山のやますその

野辺の廣きになびく朝雲

若山牧水

霧島の山のいで湯にあたたまり

一夜を寝たり明日さへも寝む

斉藤茂吉



茂吉の歌碑



牧水の歌碑

霧島は神山なれば谷々に
湧く雲さへも尊とかりけり

句えども摘まで来にけり霧島は
草のひとはも神しろしめす

海音寺潮五郎

与謝野鉄幹



潮五郎の歌碑

高千穂の霧来てひどく鴨のこゑ

のぼりゆく韓国岳の霧のなか

こまどり鳴いて山静かなり

夏が来たやら霧島山に

御山つつじの花が咲く

水原秋桜子

作者不詳

野口雨情



秋桜子の句碑



晶子の歌碑

牧園へ太鼓踊を見に来よと

使い来たりぬ瓜を割るとき

与謝野晶子

(注) 歌碑には「便り来りぬ」と彫り込んであり、この説もある。

第三十五回全国植樹祭会場跡には次の御製の碑が建っている。

御 製

霧島の

麓に苗を

うゑにけり

この丘訪ひし

むかし偲びて



御 製 の 碑

第二章 霧島温泉の沿革並びに現況

一 概 説

一般に霧島温泉と呼ばれているのは、明ばん・硫黄谷・栄之尾・林田・丸尾・栗川などの諸温泉の総称であるが、広義にはこのほか湯之野・新湯・湯之谷・塩湯・手洗・山之城・関平・鉾投・太良・金湯・野々湯・銀湯など広く霧島山中の諸温泉も含まれているわけである。

霧島温泉地区沿革についての正確な記述は困難であるが、ここでは主として『鹿児島県温泉誌』の「霧島火山地域の温泉 その一」と、二、三の古老の言に基づいて記述することにした。

これらの諸温泉は、いずれも霧島山中の山腹に散在し、いずれも標高六〇〇メートルから八五〇メートルの間に位置し、これらを相互に結ぶ道路あるいは霧島山中の旧街道といわれた道路は、熔岩地帯や火山噴出物が堆

積して、相当の難路であった。

現在では、これらの旧道は人跡もまれである。昔の旅客は湯治を目的とした自炊客が主で、馬や駕籠かごを主な乗り物として温泉に遊んだのであるが、宿舎、浴舎なども極めて素朴であつたらしい。

その後、登山・参拝客の漸増と、浴客の増加に伴い、次第に道路の一部も改修されるようになり、大正三年、牧園く霧島温泉間の道路、昭和八年、霧島神宮く丸尾温泉間の道路の開通により、日増しに便利になった。大正年間には、牧園駅（現在の霧島西口駅）く硫黄谷温泉（現在の林田温泉と霧島ホテルとの分岐点）間に、定期馬車が運行されたこともある。

さて、霧島温泉の今日をつくった功労者は、初代林田熊一（一八九〇く一九五九）である。氏は昭和四年（一九二九）、新たに今の林田温泉を開拓し、同時に、初めて霧島温泉を自動車交通網の中に入れ、足の近代化を図った。以後三〇年間にわたって、霧島温泉の開発紹介、道路の整備、輸送力の強化などについて、氏の貢献にはまことに大きいものがある。

その後、時代の推移による、特に終戦後のいわゆる観



霧島温泉地帯

光ブームによって引き起こされた観光客や、交通量の増大は、必然的に旅館の数と規模に変化を与え、したがって、また温泉の需要も激増するに至った。

すなわち、国民の生活程度の一般的向上につれて、主な来訪客が、湯治を目的とした自炊客から、観光客に変

わってきたこと、更に輸送力の強化と団体客の増加のため、その数が激増したことなどのため、旅館の増新築が急速に行われ、しかもそれらの大部分は、個人浴客のほか、大浴場、温泉プールなどを設けて、いわゆるデラックス化を図っている。

二 各 説

(一) 丸尾地区

この地区は、温泉地としては古く、ことに殿湯・塩湯・栗川などは、昔から湯治場として知られていた。しかし、ここ二十数年来は、観光温泉地として急速な発展を遂げ、小規模の旅館は姿を消し、中規模以上のホテルの新築が続いて行われ、既に温泉街の態を整えつつある。

丸尾温泉の発見は、文政二年（一八一九）といわれ、明治二十七年、野島陸軍少将がここに初めて別荘を建設以来、次々に名士の別荘建設が始まった。付近には布引滝・丸尾滝・千畳敷・岩風呂などの名所もある。

丸尾地区代表温泉の沿革

温 泉 の 沿 革	温泉の発見 （西暦）		項目	温泉名
	動機	発見者名	年号	
横尾権太 明治十七年ころ 金次郎・ほか 迫 明治二十六年ころ 萱島政光 大正二年ころ 高野友吉 大正六年以降 蔵前仁蔵 （丸尾旅館） 蔵前壮吉 （プリンスホテル） ・プリンスホテルへ引湯 ・跡地には、現在霧島国際ホテルが建設されている。	狩	横尾権太	文政二年（一八一九）	丸尾温泉
牧彦八 牧家三代経営 山口嘉次郎 明治四十年 愛甲某 昭和二十五年九月 大庭侃 （清流荘） （備考） 安井息軒が度々入湯した。	—	牧彦八	天保六年（一八三五）	栗川温泉
谷山久五郎 明治初期前後 石原八蔵 明治三十五、六年ころ 昭和十三、四年ころ 松下倫子 山口倫久	—	—	—	塩湯温泉
約二五〇年前、霧島神宮造営工事の折、開発されたといわれる。 藤井一郎 林某 山崎某 森山某 昭和三十三年ころ 折田辰次 （霧島観光ホテル）	—	—	宝永・享保のころ （一七一〇ころ）	殿湯温泉
昭和三十年、地すべり対策のため、ボーリング九〇本実施、一部源泉として利用	二 地すべり対策 新源泉掘さく	二 個 人	昭和三十年以降	その他

九尾自然探勝路



また、丸尾滝付近から自然探勝の遊歩道が、谷川沿いに造られている。霧島温泉で最も大きな集落となっている。

(二) 林田地区（林田・栄之尾温泉を含む）

林田温泉は新開発の温泉で、昭和四年以降のことであつて、その泉源も、栄之尾温泉の泉源近くであり、およそ五〇〇メートル引湯して利用している。

榮之尾温泉は比較的古く、安藤仲兵衛国広が延享元年（一七四四）四月、山中に迷い入って、所々熱湯の湧出（ナゲ）するのを発見し、藩主の許可を得て、同四年五月、自費を投じてこれを開き、文久元年（一八六一）、藩主島津忠義はここに避暑地を設けた。明治十二年の地租改正とともに、谷川を境として東地一帯を民有とした。明治十三年、高野新太郎という者がこれを借地して、温泉業を開設し、その後幾多の改良を加え、また、管理人の異動があった。

大正の初め、富田重治が直接経営することとなり、屋舎、浴場の改築を行って面目を一新した。両者とも、現在ではホテル林田温泉の経営下にあつて、広大な施設を有している。

林田地区温泉の沿革

温泉の沿革	温泉の発見		項目	温泉名
	動機	発見者名	年号 (西暦)	
延享四年(一七四七) 安藤仲兵衛国広自費 で開発 文久元年 (一八六一) 藩主島津忠義公避暑 地開設 明治十二年 (一八七九) 島津家と伊藤仲兵衛 とに分かつ	山中に迷い込み発見	安藤 仲兵衛国広	延享元年(一七四四) (西暦)	栄之尾温泉
			昭和四年(一九二九) 初代 林田熊一	林田温泉
林田正一 旅館業経営 (ホテル林田温泉)	近代的高温経営適地 と判断	初代 林田熊一	昭和四年(一九二九)	
二丁目 林田熊一 旅館業経営 (ホテル林田温泉)	昭和四年(一九二九) 初代 林田熊一 私設道路・三州館 建設 (林田旅館前身)			

(三) 硫黄谷地区

この温泉は正徳四年(一七一四)、旧踊横瀬の飯田喜八の発見したものであって、子孫がこれを経営し、文政二年(一八一九)、鹿児島島の住人桑原某がこれを譲り受け、明治十年ごろ堀切武右衛門がこの温泉地を買収した。

明治二十三年ごろ、堀切武兵衛が温泉業を開始し、その後改善を加えて営業していたが、昭和二十四年八月十六日の台風時における山崩れによって被災し、その後現在地に移転改築し、更に増改築を加えて、大規模な宿泊施設として霧島ホテルが出来上がった。また、昭和二十四年の被災時に「硫黄谷温泉よろず覚書」その他貴重な記録は、すべて失われている。

(注) 硫黄谷温泉の少し上流に、明ばん温泉があった。比較的古くから知られた温泉で、利用客も多かったが、数度にわたる山崩れのため、現在は施設もなく、堀切氏の所有で、温泉源があり、湧出する温泉は霧島ホテルへ引湯されている。

硫黄谷地区温泉の沿革

温泉の沿革	項目			温泉名
	発見年号 (西暦) 者名	動機	発見年号 (西暦) 者名	
飯田喜八	正徳四年(一七一四)	飯田喜八	硫黄谷温泉	
飯田氏子孫がしばらく経営	文政二年(一八一九)	桑原某		
堀切武右衛門買収	明治十年(一八七七)	堀切武兵衛		
堀切武兵衛営業開始	明治二十三年(一八九〇)	堀切末彦		
堀切末彦	昭和二年(一九二七)	堀切達正		
堀切達正	昭和二十年(一九四五)	霧島ホテル		
昭和二十年八月台風被災、現在地へ移転(昭和二六・六)				

(四) 横瀬地区

横瀬地区は、霧島火山群の南西部に位置し、丸尾温泉の南西約六キロメートルのところにある。中津川と山之城川の下流である小谷川との合流点がつくる小盆地に発達した標高一九〇メートルの集落である。

横瀬温泉 横瀬温泉は、慶応元年(一八六五)の発見といわれるが、湯量は豊富で交通至便

の地にありながら、温泉地としては発展せず、集落民の共同浴場として利用されているにすぎない。

轟温泉 横瀬温泉から約三キロメートルぐらい、小谷川を上った右岸に、ボーリングによ

って噴出した温泉である。ポンプアップにより約一キロメートル離れた国道二三号線の道路沿いにある施設で利用されている。

(五) その他の地区

関平温泉 町営牧園牧場の北西約四キロメートルの谷間に、こんこんとわき出る温泉であ

る。昔から切り傷や刺(さ)をたてた時は、関平の湯に入れば

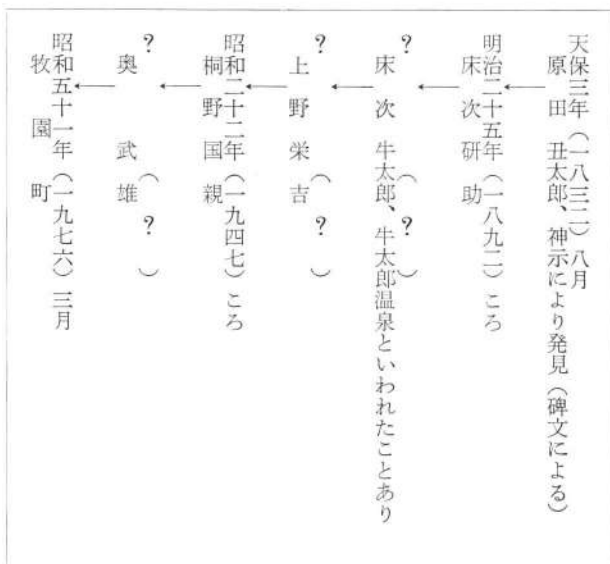
治るといわれ、また、突きささった刺も出てくるといわれていた。

明治末期から大正末期生まれの人で、林業などに経験のある人は、必ずといってよいくらい体験しているはずである。切り傷などにも効能はあるが、現在では胃腸病、その他内臓器官の障害に著しい効果があるといわれている。関平温泉から約一・八キロメートル南南西の広域農道沿いに滅菌処理工場を造り、町営によって清涼飲料水、天下の名泉「関平鉱泉」として販売しており、その量は滅菌バック二〇リットル入りで一日最高二三〇〇本、年間約二九万本に達しようとしている盛況である。



関平鉱泉
(Sekihira Hot Spring)

関平温泉の沿革



(注)

- 一、昭和三十年(一九五五)三月、国有林野整備措置法により、国有林一〇六ヘクタールの払い下げを受けた。その中に泉源があり牧園町有となった。
- 二、昭和五十一年(一九七六)三月、奥武雄から、立



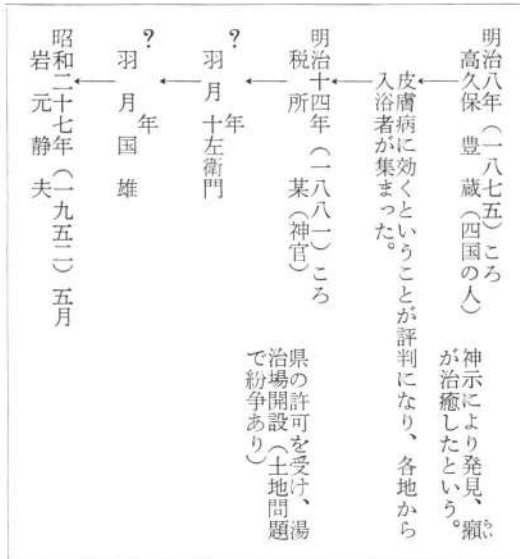
関平鉱泉販売所

木、施設（本館、湯治小屋、浴場）を含む一万〇八五八・八七五平方メートルの全部を町で購入し、完全に牧園町有となった。

新湯温泉

霧島温泉群の中にあつて珍しい湯である。林田温泉から四キロメートル上つて、えびのへの分かれ道を高千穂河原の方へ右折し、三〇〇メートルも行くと新湯温泉の入り口がある。舗装された林道を四〇〇メートルも下れば、湯煙りとともに、宿の全貌が現れる。

新湯温泉の沿革（別名 砒霜燃湯又はコシキ湯）



（注）昭和二十九年八月十八日、地すべり事故で壊滅、その後、復旧して今日に至る。

旅館部と自炊部があり、浴場は、皮膚病などによく効くといわれる乳白色をした硫黄泉で、噴気が浴槽内で泡立ち、気泡泉の役目もしている。農閑期などは大勢の老若男女が、硫黄の強いにおいの中で入浴を楽しんでい

る。

古くから硫黄泉として知られ、皮膚病に悩まされる人びとのクチコミで知られた温泉である。泉質は、硫化水素泉といわれ、その効用としては、水虫、たむし、湿疹、じんましん、うるしまけ、リウマチ、神経痛、高血圧、ぜん息、冷え症などによいとされている。

近代化された霧島温泉群の中では、ひなびたムードを充満させている温泉場である。ここから新燃岳への登山もできる。また、大浪池のふもとでもあり、高千穂河原への定期バスもあって、登山や観光にも好都合な所である。

湯之谷温泉

昔から狩人らが利用していたらしい。明治十三年（一八八〇）、修行次郎左衛門が国有林巡視中発見し、浴場を開設した。その後、内門権右衛門、野村某（彦蔵又は嘉久馬）、堀切某（武兵衛又は未彦）を経て、昭和十五、六年（一九四〇）ころから、馬場重雄が経営するようになったが、同二十七年（一九五二）八月の台風災害で、ここから一二〇〇メートル下手に移転改築し、三十六年（一九六一）に新たに三本のボーリングで、湯源地から一二〇〇メートルの湯

之谷山荘まで引湯、現在、旅館部と自炊部がある。

銀湯

いづごろ発見されたものか不明であるが、高牟礼操や井手上重友らが経営したらしい。また、銀湯には営林署の銀湯事業所があったため、昔は一二〇人くらいが住んでいて、事業所内の浴場と、共同浴場が設けられていたらしいが、現在はすたれている。

太良温泉

元文五年（一七四〇）ころ発見され、太正三年（一九一四）ころは田代藤内が住んでいたらしい。文献によれば、「下宿屋一軒、別に人家なし」との記述がある。昭和十年（一九三五）ころまでは、浴槽も宿舎もあったが、同十一年、田代春美所有となり、更に二十五年十月、十条製紙所有となっているが、温泉としての利用価値は少ない。

金湯

明治の初期か中期のころ、万膳の金という人が開拓したものと伝えられている。その後、浅田商会が営林署から土地の払い下げを受け、昭和二十六年（一九五一）に十条製紙が買収したが、その後、下堂園の所有となっており、温泉としてはほとんど利用されていない。

野々湯

昔から温泉はあった。大正二年（一九一三）ころ浅田商會が営林署から土地を払い下げてもらい、昭和二十八年（一九五三）ころ、二人ほどで野々湯組合がつくられ、浴場のほかに、休息小屋があった。同五十年（一九七五）ころ奈良県の辰巳晃が買収、更に五十五年、大阪の片山譲二が買収、施設整備を行い、現在では旅館部と自炊部がある。また、清涼飲料水として、鉱泉販売もしている。

手洗温泉

川野辰之助・佐藤アサの所有を経て、昭和二十年（一九四五）二月、初代林田熊一に移り、同三十五年（一九六〇）二月、二代林田熊一所有となる。その後、四十三年、創価学会が買収、九州研修道場として施設整備する。ボーリングなどにより、温泉は豊富である。

鉾投温泉

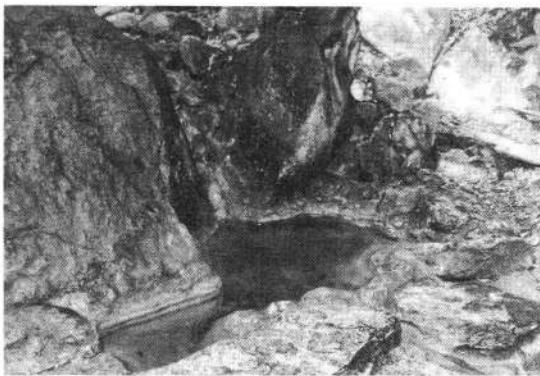
鉾投湯・鉾無湯とも呼ばれ、昔明ばんを採取していた人が発見し、鹿児島島の住人森永某が浴槽を設けたという。島津義弘の木崎原の戦い（一五七二）の時に、鉾投の泉源に関連のある故伝が伝えられている。元禄元年（一六八八）、新納久辰が増築し、その後、浅田商會と三体堂との共有の時代もあった

が、昭和九年（一九三四）七月に、牧園町有となった。

（注）かつて霧島養育院が置かれていた。また、この温泉の北方約四キロメートルの地は奥の院があった所といわれる。なお、関ヶ原の役の出軍傷者が多数湯治に來たともいわれている。

その他の 山之城地区の温泉源、冷泉、鳥地獄地区の鳥の池地獄や湯之池など至る所に噴気

があるが、現在泉源として利用されているものは少ない。



霧島最古の天然岩風呂

牧園町内の温泉の泉質と効能

地 区	泉 質	浴 用 適 応 症	飲 用 適 応 病
林田地区	硫黄泉	慢性関節リウマチ、慢性筋肉リウマチ、神経痛、神経炎、糖尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	常習便秘、リウマチ、糖尿病、胆石病、その他
硫黄谷 明ばん地区	単純硫化水素泉	慢性関節リウマチ、慢性筋肉リウマチ、神経痛、神経炎、糖尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	常習便秘、リウマチ、糖尿病、胆石病、その他
	単純酸性泉	慢性関節リウマチ、慢性皮膚病	
丸尾地区	単純硫化水素泉	慢性関節リウマチ、慢性筋肉リウマチ、神経痛、神経炎、糖尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	常習便秘、リウマチ、糖尿病、胆石病、その他
	単純硫黄泉	慢性関節リウマチ、急性リウマチ後遺症、神経炎、外傷、小児麻痺、動脈硬化症、慢性皮膚病、その他	慢性胃炎、アトニー
妙見地区	含土類重曹泉	慢性関節リウマチ、慢性筋肉リウマチ、神経痛、神経炎、糖尿病、皮膚病、動脈硬化症、その他	常習便秘、リウマチ、糖尿病、胆石病、その他
	含土類重曹泉	切り傷、火傷、皮膚病、神経痛、リウマチ、その他	慢性胃炎、胃かいよう、その他
安楽地区	含土類重曹泉	切り傷、火傷、皮膚病、神経痛、リウマチ、その他	慢性胃炎、胃かいよう、その他
	炭酸土類泉	リウマチ、神経痛、切り傷、婦人科疾患、その他	慢性胃炎、胃かいよう、その他

第三章 新川溪谷温泉郷

新川上流で妙見・折橋・安楽・日の出・新川・ラムネ・塩浸・間手ヶ原と、そのほか二、三の温泉と、馬込の甌穴群を含む約六キロメートルに及ぶ多数の温泉群と、景勝と史跡に富む地域である。

妙見・折橋・安楽、緑なす山々と、溪谷に囲まれたいで湯の里、新川溪谷温泉郷。なかでも、いつもにぎやかなのが妙見・折橋・安楽温泉である。窓の下には、さらさらと谷川のせせらぎ、カジカの澄みきった声が聞こえ、心を和ませる。特に晩秋の紅葉のころ、散りゆく木の葉を眺めながらの入浴は最高である。近年この地区は、自炊設備も整い、県外からの湯治客も多く、長期滞在者もある。また、近くに犬飼滝、和氣公流謫の際入浴されたといわれる和氣湯、そのそばに腰掛石と称されるもの、更に一段上ったところに、和氣神社などの遺跡名勝がある。湯治客のなかには、これら名勝・遺跡を訪れる人も多いので、地元では遊歩道や休息所を整備してい

る。また、遊歩道の要所には、犬飼滝までの距離を記した案内標柱が、六か所建設されている。妙見・安楽温泉から、二キロメートル以内の近距離にあるため、晴れた日の午後は、遊覧客でにぎわっている。

安楽温泉を過ぎ、二二三号線を上れば、孟宗竹林に囲まれた静かな新川温泉があり、更に上れば日の出温泉、きのこの里があり、国道が右に折れ、石坂川沿いに上れば、塩浸温泉福祉の里がある。それから国道に沿って上れば、一・五キロメートルぐらいの右下側に、間手ヶ原温泉がある。

一 新川溪谷温泉の沿革並びに現況

新川溪谷は、遠くえびの岳のふもとに源を発した三休川・手洗川が宿窪田で合流し、更に、横川町山ヶ野金山付近に源を発する通称金山川（新川上流）と、塩浸発電所付近で合し、河川の浸食作用によって生じた美しい溪谷である。いずれも河川は、比較的急流で、瀬をつくり、滝をつくり、大きく蛇行した部分もある。

この温泉群を上流からあげてみると、間手ヶ原・塩

第3章 新川溪谷温泉郷

浸・日の出・山ノ湯・新川・安楽・妙見・折橋・和気など、これらのほか河床あるいは河川沿いの地点で、炭酸ガスを伴った温泉が、未利用のまま自然湧出している箇所もある。

これらは、医治効能を高く評価されてきた温泉が多く、施設・設備も、近年面目を改め、逐次近代的に脱皮しつつある。ただ、折角風致的に優れた景観、環境、温泉などを荒廃させないように、十分な配慮がなされるべ



新 川 溪 谷

きである。

当地区内の温泉発見の時期は、表のとおりである。

この地区の温泉の性質が、いずれも重炭酸泉に属しており、新川（天降川）水系に沿って、温泉の位置が上流から下流になるにつれて、重炭酸土類泉から含食塩重炭酸土類泉となり、更に含土類重曹泉と変わっている。

なお、温泉は、自然湧出又は浅い掘削によって自噴しているものを、そのままか、あるいは簡単な工事を行い、機械揚湯して利用しているが、源泉の場所が河川敷であるケースも多く、この傾向は、今後温泉量需要の伸

温泉発見年代

温 泉 名	発見年（西暦）
間手ヶ原温泉	明治34年（1901）
塩 浸 温 泉	文化3年（1806）
ラムネ温泉	明治38年（1905）
日の出温泉	文化8年（1811）
山ノ湯温泉	嘉永3年（1850）
新 川 温 泉	不 詳
安 楽 温 泉	康治元年（1142）
妙 見 温 泉	明治13年（1880） （以前）
折 橋 温 泉	宝暦2年（1752）
和 気 温 泉	不 詳

びとともに、増加するものと思われる。

しかしながら、あまり進むと、地区によっては相互間に干渉がひきおこされる可能性もあり、また、今日でも、多くが出水時などにはたいへん苦労している実情であるので、将来なんらかの形の温泉集中管理機構をつくり、思い切った施設で、現在未利用のまま放流されている河川敷の、豊富な自然湧出温泉をも利用することを考慮に入れて、集湯配湯を行うといったような構想を、考案しておくことが必要であろうと考えられる。

1 間手ヶ原温泉

明治三十四年（一九〇一）の発見といわれる。国道二二三号線沿いの間手ヶ原にあり、交通は便利であるが、近くに有名温泉が多いため、浴客は多くない。また、噴出口が低所にあるため、電力を使用して揚泉している。

2 鶴の湯

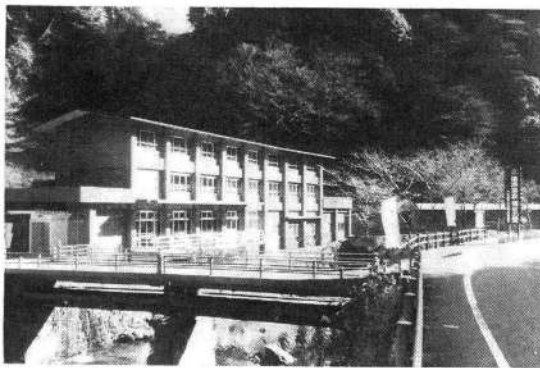
塩浸温泉の上流約一〇〇メートル余のところにあった。明治四十二年（一九〇九）に出水町の土屋清人・山下朝憲が共同して岩壁を砕き、辛うじて一〇〇坪余（約三三〇平方メートル）の平地を開き、浴場を建てた。また、約一〇〇メートル上方の道路わきに、二階建ての旅

館を建造し、浴客を引こうとしたが、時宜に適せず、失敗に終わり、当時数万円を投じた観光事業も、ついに放棄した。現在国道二二三号線の開通により、浴場は旧形をとどめていないが、お湯は現在の塩浸温泉場に引湯しており、利用客も多い。

3 塩浸温泉

昔、鶴が傷をいやしたというので、鶴の湯ともいわれていたが、その後、川ぶちの岩に塩鱈かきのついているのを見つけ、塩浸温泉と称するようになったという。

また、幕末の安政年間のころ、浴場を改築



塩 浸 温 泉

し、家屋を建て、浴客誘致の宣伝をしたが、幾年を経ずして放棄された。

慶応三年（一八六七）ころ、福山郷の岡元助八が湯守となり、浴場などの改築を行い、大いに宣伝した。時あたかも戊辰の役の負傷者の治療に大いに効能があったので、県下に広くその名を知られるようになった。

この名声が藩主の耳に入り、島津家からの使者が派遣され、時の横目付永田与右衛門に計らい、山道を開き、浴槽並びに民家を建てて温泉場とした。そのころから、塩浸温泉と称するようになった。以後、その名声が遠近にとどろき、鹿児島はもとより、広く県外からも浴客が集まり、ますます名温泉となった。

塩浸温泉場は、慶応四年（一八六八）以前、藩庁工事前は、温泉湧出口の土砂を上げ、わずかに数人を入れるぐらいの湯つぼであつて、屋根は雨露をしのぐ程度の構造であつた。また、東方の坂道は危険で、一部分ようやく一人ぐらいを通すほどの道であつたので、時の踊郷役員からの申請によつて、湯守支配人は少額の運上金（地料）を藩庁に納めていた。この間の経緯は「平山泰介事績」に詳述されている。その一部をあげれば、次のとお

りである。

其ノ温泉効能ハ切創、梅毒ニ著名ナルハ広く伝ワル、故ニ藩庁ハ明治戊辰役出軍負傷者ノ療養所トシテ、藩主御手許金ヲ以テ大工事営マル。石工権太郎（近在小野村住人）ニ命ゼラレ、数十名ノ石工人夫入り来リ、河川堤防東側ノ坂道切石ヲ以テ築キ上ゲ（現存スル）、鹿児島方面往来道中ノ内嘉例川新道七曲坂開サク及ビ家二軒新築修繕十一軒湯壺三ヶ所改造橋架設等其ノ費用多額ヲ要セラレシト言フ。為ニ境内外共面目ヲ一新シ、從ツテ負傷者及ビ同行者多数入り来リ頓ニ繁栄ス。依ツテ温泉場ハ旧習ヲ改メ、藩庁直属トナリシモ、元來收入目的ニアラズ。従前踊郷ニ於テハ、其ノ收入利得ハ、貧民救済即チ貧民者ノ農馬購入補助費ニ充當シ、来リタル関係上、明治九年九月宿窪田村ニ私下以前ニ於テモ幸ニ踊郷ニ收入シ得タルナリ。尚廢藩置県後、收入全部ヲ牧園校經費ニ繰入レタリ。尚塩浸温泉場無償払下願ハ次ノトオリデアル。

郷内供有地之願、踊

一、木屋二十一軒

内 二軒

右老行慶応四辰年旧藩會計局ニテ新造立

十一軒

右老行同年同計ニテ本木屋修車取繕

二軒

右老行所計ニテ造立

六軒

右老行当支配人秋山嘉一郎先支配人ヨリ附屬併新造立

温泉三坪

但慶応四辰年旧藩會計局ニテ修甫

右者当郷塩浸温泉場ノ儀、弘化年間ニ取計ヲ以開立本行内書ノ通木屋造建仕其砌ヨリ諸人入込ニモ相成場所ニ御座候。○旧藩代御手ヲ被相付尤支配人木屋木屋モ御座候。

右ノ通ニテ是迄所役員ヨリ依申立支配人被召替去明治五年壬申春ヨリ向フ十ヶ年季ヲ以テ秋丸嘉一郎へ支配人被仰付置年々金拾参円拾五錢七厘九毛宛所方へ差出シ来リ候。今般地租御改正被仰出候ニ付テハ諸温泉場ノ儀宅地ニ可取調旨御達ノ趣承知仕右ニ付テハ塩浸温泉場ノ儀右之通ノ場所ニ御座候ニ付キ誰ソ一人特ニ可被仰ハ場所柄ニモ有御座間敷吟味仕依之郷内供有地ニ被仰付度尤外温泉場ニ相替是迄郷内救助筋ニモ相成場所柄ニテ誰ソ一人へ地主被仰付候テハ右式難有用途モ失ヒ、殊ニ当郷内学校保護ノ見込別段良法等無御座右温泉ノ儀外温泉十有余箇所第一ノ場所ニテ仮令地租相掛候テモ相応ノ余勢ハ可有御座候ニ付願ノ通御

間届於被成下ハ当分ノ振合ニ倣ヒ嚴重取扱仕学校資本ニ備置候得ハ一統難有次第商議仕候何卒郷内温泉場右旁々ノ御取訳ヲ以テ奉願候通供有地御許可被仰付被下度此段奉歎願候也。

但鹿岡面相添差上申候。且ツ願通り被仰付テハ旧藩代御造立木屋之○輕キ貸申受被仰付度

副戸長 区戸長

泰介は先の踊郷地頭の椎原国幹（西郷翁の叔父）に依頼して、その尽力によって目的を達しようとし、時の大山県令に伝達方を頼み、六回にわたって役員交替で払い下げ陳情した。その結果ようやく明治九年九月払い下げが確定した。その全文は次のとおりである。

其郷塩浸温泉場処分ノ儀向出趣有之及指令置候処、右ハ取消更ニ左ノ通可相心候事。

塩浸温泉之儀ハ其村共有地ニ取調湯壺ノミヲ大量求積可致支配人年限中ハ是迄ノ通ニテ地租差出儀共相对可為熟談尤年季明ノ上ハ所中ヨリ支配可致事。

但明治五年壬申春ヨリ已年迄拾ヶ年秋山賀一郎支配

同丑年ヨリ卯年迄向拾ヶ年堀之内勘五右エ門支配

旧藩計算所計造立湯木屋ノ儀ハ其村共有地宅地ニ取調支配人年限中ハ前条同断タルベキ事。

但旧藩計造立湯木屋ノ儀ハ無代価払下申付候。

当支配人私有ノ家屋設置地ハ其村共有ノ宅地ニ可取調事。

但建物ハ支配人交替ノ節売渡候カ又ハ解毀候共所有主可勝手事。

九月九日

鹿児島県参事 田畑常秋

ここで塩浸温泉払い下げの経緯について記しておく。

当時の踊戸長平山泰介は、藩所有の塩浸温泉場及び城山の無償払い下げを計画し、願書をたびたび提出したが、この温泉は旧藩庁時代に多額の費用をかけて修理した関

塩浸温泉の沿革

契約年月日	賃貸人	賃借人	沿革
安政の末	郡奉行 伊集院 周 八	国分町 丸山 栄右衛門	湯守の許可を受け、浴場を改修し、浴客を引く計画をしたが、幾年もたたないうちに放棄した。
慶応元年	万膳村 園田 麦右衛門		上の後を受けて営業をしたが、湯銭は取らず、茶店や、中食の菜の求めに應ずる程度で、二年後に放棄した。
慶応三年	福山郡 岡山 助 八		賃借人が湯守となり、浴場、家屋の改築をし、大いに宣伝につとめたところ、次第に入浴者が増加した。そのころ、戊辰の役で多くの傷病兵が帰還したので、藩公は、この効能卓絶した温泉を療養所に充てるため、御内帑金を支出して一大工事をし、督励されたので面目を一新した。時の作業奉行が、川淵の岩角に塩竈が付着していたのを見つけて、塩類温泉であると思い、新たに「塩浸温泉」と改称した。
明治五年	鹿児島西田 秋山 賀一郎		明治五年壬申春から向こう一〇か年間、支配人を命ず。儲賃金、年一三円一五銭七厘九毛宛、明治十二年四月まで踊郷学校方へ年々税金

係もあって、容易に許可されなかった。そこで泰介は、先に踊地頭であった椎原国幹に依頼することを思い立ち、その事情を述べて大山県令に尽力方を頼んだところ、椎原はいまだかつて大山県令に願ひ事を取り次いだことはなかったが、泰介の願ひを快く引き受け、県と交渉した。その結果、明治九年（一八七六）九月、同温泉の土地建物ともども、無償で時の鹿児島県参事田畑常秋の名で払い下げを受けた。

契約年月日	賃貸人	賃借人	沿革
明治九年九月	鹿児島県参事 田畑常秋	郷村	二〇円宛 秋山賀一郎に明治十五年十二月末まで、翌年一月から各二十五年十二月まで、堀之内勘右衛門に、これまで通り、一か年金一〇〇円あって、当牧園小学校へ差し出し、学資金とすることを条件に、踊郷に無償払い下げの許可あり。
明治十六年一月		堀之内直治	(勘右衛門改名) 湯守となる。
明治十八年			まれな暴風雨が あつた。大洪水で、堤塘が崩れ、家屋はおおむね倒壊し、大損害を受け、回復の見込みがないとして、売却の儀が起つたが、一大奮発し再興した。しかし、風水害に加えて、一般的に不景気のため、浴客は衰退した。
昭和三十五年一月			塩浸温泉「河鹿荘」オープン
昭和四十四年七月 昭和五十六年六月	牧園町直営		塩浸温泉「河鹿荘」は、国道二二三号線の改良工事のため、取り除かれていたが、町ではこれを再建するため、川向かいに鉄筋三階建ての施設を建設し、牧園町営塩浸温泉センターとして開館した。
昭和五十六年七月 昭和六十三年五月	牧園町	石下谷学	民間委託
昭和六十三年七月 九月			町の工事のため、自衛隊員宿舎として使用
平成元年一〜六月			
平成二年	牧園町	町、社会福祉協議会	「塩浸温泉、福祉の里」 住民福祉の向上と、老人並びに身体障害者らに対し、保養、休憩を提供する(町社会福祉協議会に委託)。

4 ラムネ温泉

国道二二三号線沿いにあり、新川溪谷中最も溪谷の美しいところである。紅葉のころは、カエデがいつそう景色を引き立てる。近くには、伝説の熊襲の穴もある。泉質は、天然炭酸ガスを多分に含有しているため、酸味を有し、飲みやすく、多量に飲用できる。胃腸病によく効くほか、じん臓、糖尿病にもよい、といわれている。宿泊設備もあり、自炊施設も整い、交通の便もよい。(現在、休業中)

5 日の出温泉

この温泉は、文化八年(一八一)に踊郷有馬武太夫の発見したもので、同十四年から温泉経営に着手した。切り傷、皮膚病に特に効能が顕著であったため、将来の有望性が認められ、明治三十年三月、有馬武太夫から牧園村が買収した。もと、平落温泉と称していたが、同三十七年から現在の名称となり、昭和二年湯槽の改造をし、続いて同四年に自炊家屋の大改築を行い、更に新国道二二三号線の開通により、面目を一新して今日に及んでいる。

現在は「きのこの里」として農産物、林産物などの販売



日の出温泉
(きのこの里)

もされており、盛況を呈している(町、森林組合が管理)。

6 安楽温泉

湯治客でにぎやかな安楽温泉は、妙見と並ぶにぎやかさである。安楽温泉は、『三国名勝図会』には、「この地より温泉出づべし、安楽に居住し得ん云々」とあり、それ以来、この里一帯を「安楽」と呼ぶようになった。気



安 楽 温 泉

候は温暖で、泉質豊富、付近は旅館をはじめ自炊客業、民宿を営む十数軒があつて、多い時は四、五百人もの湯治客を数える。平均の滞在期間は一週間ぐらいとか。宿泊施設も多く、「人間回復」にはもってこいの温泉である。

7 妙見温泉

妙見温泉は、明治二十八年（一八九五）に、田島十郎次によって発見され、早速浴槽を造り一般に試浴させたところ、諸病に卓効があるのに驚き、妙見神社の旧跡から湧出するのになみ、妙見温泉と命名した。同四十年

（一九〇七）来、営業を開始し、今日に至ったものである。

妙見ラムネ温泉

（今の雅叙苑）は、

大正七年（一九一

八）、田島伴次郎

が発見したもの

で、妙見温泉とと

もに、リニューマ

チ、神経痛その他

諸病に卓効をみる

ので、四季を通じ

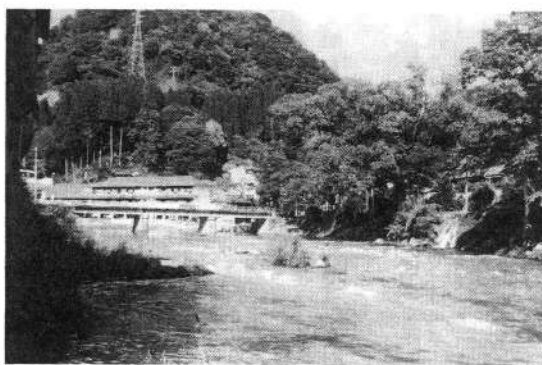
入浴客の絶えることがない。最近では旅館、ホテル数も多く

くなり、各般の設備も充実し、着々と近代化への歩みを

整えつつある。

8 折橋温泉

この温泉は、宝暦二年（一七五二）に、折橋左門によって発見された。鉄湯・明ばん湯など、種類や泉量に富



妙 見 温 泉

む温泉である。明治十年（一八七七）、薩軍の傷病兵が来浴し、その偉効を宣伝してから、その名が世に広まったといわれる。同十二年、久木田五介が買収して、内外の設備を整え、やや面目を改めたが、なお遺憾な点が多く、久木田五郎の経営に移ってから施設も大いに進み、今日の盛況をみるに至ったものである。自炊設備も整備され、多数の自炊客を収容することも可能である。内湯施設も完備。なお、鉄湯は外科的治療に効果があるといわれる。

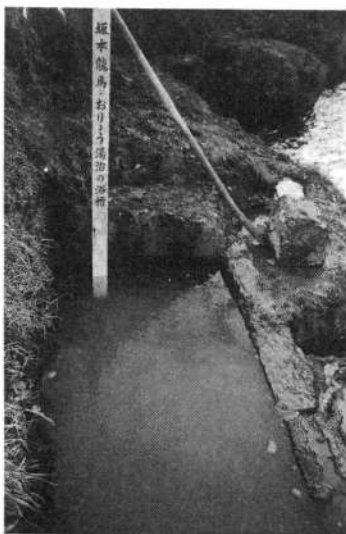
9 坂本龍馬のハネムーン

幕末の志士坂本龍馬が、恋女房のお龍を伴い、この地に遊んだのは有名な話。今でいえばハネムーンのはしりだろうか。絹ごしのようなさわやかな空気、清らかなせせらぎ、美しい自然、そして心あたたまる人の情、それらすべてが龍馬の心をとらえたのであろう。姉にあてた手紙の一節に、「塩浸^{しほひ}には、十日ばかりも宿りて遊び、谷川の流れて魚を釣り、ピストルをもちて鳥をうつなど、実におもしろかり……（略）」とあり、龍馬夫妻は飛沫^{つた}はげしい犬飼の滝を訪れ、更に神話の地高千穂峯まで足を延ばして、天の逆錡をみて、「その形、たしか

に天狗の面なり。二人大いに笑いたり……」とユーモアのある面をのぞかせている。

この年、龍馬の奔走により、西郷・大久保・木戸と会い、ここに薩長同盟を成立させるという大役を果たしている。お龍というのは、有名な「寺田屋事件」の寺田屋の養女、寺田屋は薩摩藩の船宿であった。勝海舟の使者として、西郷と会った龍馬は、その後薩摩藩の保護を受け、西郷とは公私ともどもの交際をするようになった。また、高千穂峯に登った時硫黄谷温泉にも泊まったという。

（注）坂本龍馬夫妻がこの地を訪れたのは、慶応二年（一八



坂本龍馬・お龍湯治の浴槽

新 川 溪 谷 自 炊 部 施 設

(人)

施 設 名	通 称	一般収容人員	団体収容人員	施 設
鶴乃湯(鶴ヶ野)	つるの湯	50	50	自炊施設
大徳館(賀 来)		50	50	〃
安 栖 武 彦		30	30	〃
安 栖 フ ズ		30	30	〃
安 栖 重 男		20	20	〃
さかいだ温泉		50	50	〃
安 栖 チ エ		50	50	〃
安 栖 重 樹		100	100	〃
佐 藤 圭 二		30	30	〃
きのこの里		20	20	〃
みょうばん湯		14	14	〃
合 計		444	444	



坂本龍馬・お龍新婚湯治の碑

慶応二年三月、寺田屋事件で九死に一生を得た坂本龍馬は、西郷隆盛らのすすめで、妻お龍とともに当塩浸温泉で傷をいやしながら霧島にあそび、二人の生涯で最も楽しい生活をおくった。これが日本の新婚旅行の始まりといわれ

六六〇 三月のことで、二人は大坂から蒸気船に乗り込み、長崎を経て十日に鹿児島に到着。それから、日当山・塩浸・栄之尾を経て高千穂峯に登っている。文中のピストルは、寺田屋で幕吏と死闘の際に使用したものであるという。

ている。龍馬は翌年京都近江屋において暗殺された。時に三十三歳であった。近代日本の礎を築いた龍馬ゆかりの地に町内外の浄財を仰ぎ、この像を建て後世に伝えるものがある。

平成元年十一月吉日

建設 坂本龍馬銅像建立委員会
制作 日展委嘱彫刻家 楠本香代子
題字 牧園町長 川畑 義照

〔参考〕 坂本龍馬・お龍像建立の経過

昭和六十一年六月、牧園町史談会が史跡研修の際、鹿児島市の天保山公園で龍馬・お龍の像を見つけ、「二人が生涯で最も楽しい生活をおくった牧園の塩浸温泉にこそ像を建てよう」と意見が一致した。それ以来、像の建立委員会を結成、メンバー一三人の平均年齢七三歳の高齢だったが、毎日町民一人ひとりに趣旨を説明する一方、全国に寄附を呼びかけるなど運動した。以来三年五か月、龍馬の出身地である高知市をはじめ全国の龍馬ファンを含め約二一〇〇人から、一四五〇万円の浄財が寄せられた。像は、高さ一五〇センチメートルの台座

の上に左に太刀を持った龍馬（高さ一八六センチメートル）、それを見上げるお龍という幕末志士とその妻を表した、等身大のブロンズ像が完成した。

町も像周辺の整備事業を実施し、県は像の横を流れる天降川を「親水公園」として改修した。平成元年十一月二十三日、現地で除幕式が、像制作者楠本香代子、高知市代表、町長、その他関係者多数出席のもと、盛大に実施された。このことは高知県でも大きなニュースとして取り上げられた。

二 名 所

1 犬飼の滝

蒼くそびえる高千穂峯を背景に、静寂の空気をふるわせて、虹色の飛沫をあげる犬飼の滝。かつて和気清麻呂がここで遊び、明治維新の立役者坂本龍馬も、この滝を眺めたという由緒あるもの。高さ三六メートル、幅一八メートルの純白の帯は、まさに壮観。今では滝の近くまで遊歩道が開かれ、近くには清麻呂ゆかりの和気神社、そして、和気の湯もある。

犬飼の滝自然遊歩道



犬 飼 の 滝

2 和 気 の 湯

中津川の下流に、露天風呂で知られる和気の湯がある。奈良時代、一僧侶でありながら、天皇と等しい実権を握ろうとした野心家道鏡と争い、この地に流された和気清麻呂ゆかりの地で、日ごろ、公はこの温泉に入浴され、浴後公が腰掛けられたという腰掛石も現在残っている。山峡の湯煙りが、当時をわずかに偲ばせている。

3 馬込地区の甌穴群

牧園町中央公民館前のバス停から、県道牧園宮之城線を霧島西口駅の方へ約二五〇メートルぐらい行き、ひばりヶ丘の住宅がみえはじめるところから、山手の方へ左折する道路がある。その分岐点に、天然記念物（名勝）馬込地区甌穴群入り口の道標が立っている。この甌穴群の壮観な様は、他に例のない名勝地として、昭和五十二年四月十五日、町文化財に指定された。

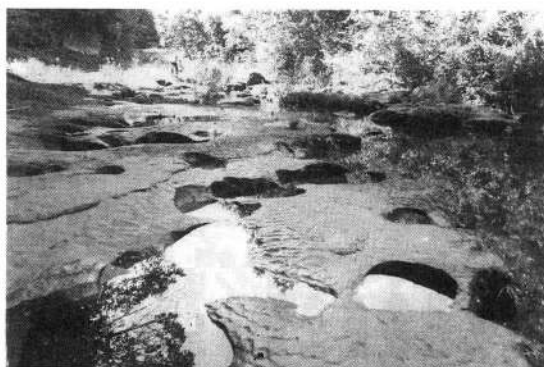
起点上流左岸の大字宿窪田一六五五番地（字

第1図 甌穴群位置図



馬込)から、終点下流大字宿窪田一六五八番地(字馬込)に至る間、長さ約四三四メートル、面積一万二二五七平方メートルである。対岸は横川町になっている。昭和五十一年五月十二日、鹿大教授石川秀夫(理学博士)の調査によれば、塩浸発電所の取水口下流にあるた

め、河水が少なく、河床をくまなく観察することができ。それが、シャープな姿で保存され、その河床は、霧島山系に属する溶結凝灰岩で、甌穴のできやすい岩盤である。長年月にわたり浸食されたため、兩岸のかなり高い辺りまで、甌穴が存在している。



馬込の甌穴群

第2図 甌穴群所在地見取図



甌穴の散在は第2図のA・B二点間が最も多く、長さ約四三四メートル、幅の広いところは四六メートルにも及んでいる。甌穴は、軟弱な岩盤の河床に、軽石や安山岩、礫^{れき}などが岩穴を形成することからはじまり、円形、長円形などの甌穴ができるが、その穴がいくつかつながら

時期の乾燥期が最適である。九州電力も必要以上の水は取水しないので、水量の多い時はみられない。土地の話では、二、三日から一週間ぐらいはみられないことが、往々あるという。

て、溝形になることもある。なかには形がゆがんで、第3図のようにスプーン形や鎌形^{かまがた}になったりする。馬込地区には、これらの形が判然としているものが、多数存在している。ここは、規模も大きく、かつ、甌穴の形容も判然としていて、まれにみる甌穴群で、観光的にも価値の高いところである。

しかし、甌穴群観光はいつでもよいというわけにはいかない。上流の水田に水を引く

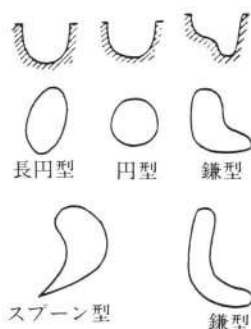
昭和三十九年に霧島温泉の中心地、丸尾に霧島観光の中核として建設された霧島温泉観光案内所は、年間八〇万〜九〇万人の宿泊客を迎える霧島温泉の顔として、その観光PRを主目的としている。

近年は、観光客を温かく迎えるために各種のイベントの実施にも力を入れており、以下に記すようなイベントを開催することにより本町のイメージアップを図るとともにマスコミなどの媒体を通して、霧島観光のPRを行っている。

今後は国民の所得の向上と余暇時間の増大に伴い観光

三 霧島温泉観光案内所

第3図 断面図



霧島温泉観光案内所

需要はより増大してゆくものと考えられる。また、国民の生活意識の変化により観光動向も今までのように団体旅行の見て歩く観光型から小グループによる滞在型の観光にうつり、量から質へ、国内から海外へなど観光についての個性化、差別化がでてきている。このような新しい観光動向に即応した観光地とすべく、本町独特の天与の美しい自然と湯量豊富な温泉を持つことから、今後より魅力あふれた観光地づくりに努力している。

1 霧島競馬

本町は昔から馬の産地であり、明治からは種馬の繁

殖・育成を行っている。四月二十九日（みどりの日）に牧園牧場において草競馬を行う。走る馬もポニー種をはじめノルマン種、サラブレッド、アラブ種などの馬で、本県内はもとより宮崎県からの馬の参加もあり、当日は一日中多くの観客でにぎわう。また、馬の生産者の楽しみの一つでもあり、その生産意欲の一助にもなっている。

2 霧島国際音楽祭・講習会

夏、涼しい霧島において世界各国から著名な音楽家を迎え、講習会をはじめとして演奏会などが二週間にわたり行われる。また、鹿児島県の霧島国際芸術の森構想により本町に音楽ホールが建設されることが発表され、今後はより発展した音楽祭となることが予測される。

3 霧島高原太鼓まつり

本町の郷土芸能、神話「天孫降臨」にちなんだ天孫降臨霧島九面太鼓の保存・振興を目的として、夏の夜に和太鼓を中心とした競演会を開催している。

全国各地から有名な和太鼓のグループを迎え演奏会が行われるが、その一流の演奏は観客に深い感動を与えてくれる。また、地域の夏祭りとしてもかなりの評価をう

けている。

4 霧島高原サイクルジャンボリー

本町の地形を利用した自転車による競技である。十一月の紅葉の一番美しい時期に開催される。種目にはロードレース、サイクリング、一輪車、マウンテンバイクなどがあり、メイン種目のロードレースは標高差一〇〇〇メートルの上り坂だけのコースで全国でも珍しいコースであり、参加者も年々増えてきている。現在は九州内からの参加者が多いが、今後は全国各地からの参加が予想される。

第四章 今後の観光開発計画

一 基本方針

観光は町の産業の主要な地位を占め、就業構造においても、大きなウェイトを持って発展してきており、観光のニーズは多様化、個性化してきている。人々の関心は、物質面での充実を背景に、モノから精神的な豊かさである安らぎやゆとりに向けられるようになってきた。

観光においても、健康志向や、自然とのふれあい、ふるさと志向といったニーズが高まっている。また、観光地に求められるものは、生活文化である。その土地で、社会的に慣習化されてきた生活パターンそのものである。

「見る」から参加へ、そして「創造」へと観光は移り動いている。

本町の観光は、雄大な自然、豊富な温泉、固有の伝統文化など多様で、特色あるものを有しており、各地域では、リゾート計画、観光地の開発を目指して施設の整備

が盛んに行われている。今後はますます観光地間の競合が激化するものと思われる。

本町としても、その中で生きていかなければならない。観光地づくりにおける最大の欠点は、物づくりを優先させていることにあるといわれている。「どんな観光地にするか」が、今、霧島に問われているのではないだろうか。魅力ある観光地として、美しい景観の形成、修景、環境の保全、自然保護といった、人にやさしい観光地づくりを進めることが重点となる。

二 現況と課題

美しい自然、そして、豊富な温泉と、ほかにもものを持っている観光地「霧島」である。そのイメージを高めるため、各種のイベントが実施され、その中でも、国際音楽祭は、霧島の名を世界に売り出している。また、地域文化としての太鼓祭りも文化と観光が交わったものとして、非常に評価が高い。

近年の観光客の入り込み数は、平成元年度は前年度を上回っているものの、それ以前は毎年減少していた。昭

和五十年の宿泊客数九一万人は、平成二年においても達成できそうになく、他地域にない個性的な観光地づくりを進めなければならない。

三 計画の内容

緑あふれる農村風景は生産の場であると同時に、美しい、魅力的な観光対象である。本町の観光も一つの点でなく、面でとらえる時期にきている。あらゆるものが、観光対象となることを考え、どんな施設を造るかでなく、どんな観光地にするかである。

観光客の欲求の条件を満たす観光地づくりは、対象客層とその行動様式を設定することから進めるべきである。また、魅力づくりとしては、「観光地霧島」の空間の演出であり、環境整備施設のデザイン、スポーツ施設、文化施設、ゆとり施設である。観光客にどのような快適に過ごしてもらうか、次のようなソフトプランが最優先すべきである。

(1) 観光資源

ア 霧島地区

○わが国最初の国立公園指定（昭和九年Ⅱ一九三四Ⅱ三月）

○山、天然記念物 ミヤマキリシマ・ノカイドウ

○原生林、温泉、国民保養温泉地

○景観 高原、滝、紅葉

イ 新川渓谷地区

○国民保養温泉地、渓谷、川、川魚

○温泉療養地、和気公園、温泉神社

○きのこの里、坂本龍馬湯治の里

○大飼の滝、モミジ・ネムノ木

○温泉、清水

ウ イベント

霧島競馬、霧島高原太鼓まつり、霧島高原サイクルジ

ャンボリー、霧島国際音楽祭、紅葉杯ゴルフ大会

(2) 霧島のイメージ

馬、休養、景、大浪池、霧、山、高原、花、緑、温泉、四季、空気、涼、水、小川

観光地「霧島」を伸ばすため、あらゆるものが考えられるが、「景観」「イメージ」を大切にしながら、観光地づくりを進めていくことを考えなければならない。

○健康づくりを基本とした施設造り（温泉、テニスコー

ト、ゲートボール場など)

○生活文化を基本とした施設造り(文化村づくり事業)

○絵になる環境づくり(川、ロードパーク、花)

○安心できる施設造り(案内板、街路灯)

その他、新しい観光資源の開発も図る必要がある。その一つの表れが「牧園町五大イベント」である。

〔参考〕 牧園町五大イベント

霧島国際音楽祭

□期間 七月二十五日～八月八日

霧に浮かぶ峰々が神秘的なたたずまいを見せる霧島で霧島国際音楽祭が開催されます。恵まれた大自然のふところ深く湯煙のたちのぼる霧島温泉郷に内外第一級の芸術家が集い、講習会・野外コンサート・演奏会が行われる。あなたも優雅なクラシックの演奏に酔いしれてみませんか。

霧島高原太鼓まつり

□期日 八月第一土、日

満天の星空の下、霧島高原に五尺八寸の太太鼓が響けば、全国有名太鼓大競演の始まりです。毎年日本全国から有名な太鼓グループを迎えて開催いたします。

紅葉杯ゴルフ大会

□期間 十一月一日～三十日

紅葉の美しい霧島高原でゴルフを楽しみませんか。霧島ゴルフクラブ・高千穂カントリークラブの2会場で1ヶ月間の全スコアード順位を競います。どなたでも自由に参加することができます。

霧島高原サイクルジャンボリー

□期日 十一月中旬

誰にでも楽しめる身近なスポーツ、自転車。体力測定のもりで気軽に参加しませんか。標高差一、〇〇〇メートル、距離二〇キロメートルのロードレースから、原野を走るマウンテンバイクレース、ファミリーサイクリング、一輪車レースなど誰でも楽しく参加ができます。

霧島競馬

□期日 四月二十九日(みどりの日)

ツツジが咲き乱れ、山々が一斉に鮮やかな緑の若葉をつけるころ霧島競馬の季節です。ポニーレース・農耕馬レース・本格的な競馬の醍醐味が味わえる軽種レースが行われます。

霧島の季節の花

・菜の花(生駒高原)

・桜(霧島高原)

・チューリップ(霧島高原)

三月中旬～四月上旬

三月下旬～四月上旬

四月中旬～四月下旬



サイクルジャンボリー

- つつじ（霧島高原）
四月中旬～五月中旬
- アイスランドポピー（生駒高原）
四月中旬～六月上旬
- ノカイドウ天然記念物（えびの高原）
五月上旬
- ミヤマキリシマ（霧島連山）
五月中旬～六月上旬
- ススキ（えびの高原）
九月上旬～十月上旬



霧 島 競 馬

- コスモス（生駒高原）
九月下旬～十月下旬
- 紅葉（霧島連山）
十月下旬～十一月上旬

四 観光客入込数並びに今後の入込客数推計

霧島湯泉・新川渓谷地区観光入込宿泊数調べ（入湯税資料）

年	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	暦年計年度
昭和														
51		53,744	76,610	95,863	81,696	100,235	62,113	61,376	86,370	49,079	106,287	98,102	47,785,919	260,916,116
52		57,211	69,999	95,366	74,965	85,024	60,201	58,514	90,243	66,841	99,996	87,985	44,791,891	136,865,180
53		48,986	52,208	87,636	70,886	84,852	51,704	55,199	94,530	70,594	97,259	93,954	45,471,853	279,856,452
54		53,540	50,827	87,485	62,516	88,988	65,250	64,496	99,428	68,775	93,614	103,721	53,368,892	008,895,304
55		52,927	54,736	90,810	71,368	88,651	50,374	64,234	100,389	73,468	99,654	99,308	43,296,889	215,873,080
56		46,490	45,038	83,813	69,002	83,173	56,711	61,120	95,668	69,540	96,976	97,698	41,362,846	591,852,656
57		52,602	44,991	84,200	69,243	80,971	46,275	54,517	88,631	63,527	101,332	91,248	44,941,822	478,819,098
58		46,739	47,474	74,988	56,945	75,242	43,484	76,791	99,591	55,395	92,991	78,965	40,975,789	580,794,703
59		48,533	50,803	75,082	65,868	76,115	47,828	73,602	100,758	69,708	92,260	90,815	49,293,840	665,846,672
60		50,775	54,568	74,546	63,900	78,079	45,491	71,819	97,436	61,139	87,452	76,739	42,531,804	475,793,721
61		45,975	48,614	73,192	59,254	75,331	41,859	49,351	91,702	66,321	94,824	85,116	46,590,778	129,794,209
62		51,727	52,736	79,398	62,135	84,324	54,489	54,424	89,647	65,843	95,661	93,089	50,389,833	862,846,593
63	平成	57,990	58,602	79,979	70,273	81,391	52,071	65,214	87,555	63,474	87,241	78,479	48,077,830	346,829,834
	元	55,077	61,347	79,635	71,298	84,323	47,310	54,486	89,293	67,857	92,388	93,445	57,492,853	771,880,734

（資料：観光課）

観光客入込状況と推移

(1) 観光客の入込客数

(単位：千人)

年度別	霧島温泉地区	新川溪谷地区	計	対前年
昭和				
54	1,630	161	1,791	105%
55	1,598	148	1,746	97%
56	1,569	136	1,705	98%
57	1,515	123	1,638	96%
58	1,477	112	1,589	97%
59	1,577	116	1,693	107%
60	1,472	115	1,587	94%
61	1,465	123	1,588	100%
62	1,545	148	1,693	107%
63	1,506	154	1,660	98%
平成 元年	1,607	154	1,761	106%

(注) 昭和48年度を100とした場合、平成元年度は101となっており、新川溪谷地区は72と減少している。霧島温泉地区については、106とやや伸びている。

(2) 観光客入込計画（推計）

(単位：千人)

年度別	霧島温泉地区	新川溪谷地区	計
平成			
2	1,613	155	1,768
3	1,619	156	1,775
4	1,625	157	1,782
5	1,632	158	1,790
6	1,638	159	1,797
7	1,644	160	1,804
8	1,650	161	1,811
9	1,656	162	1,818
10	1,662	163	1,825
11	1,668	164	1,832

(注) 観光客の増加を、過去5年間の平均0.4%増と見込み、推計した。観光客数は延べ人員であり、県内容も含む。

第4章 今後の観光開発計画

観光宿泊施設

1 宿泊施設

(1) 霧島温泉地区 ホテル・旅館など

宿泊施設数	室 数		収 容 人 員	
	洋 室	和 室	一 般	団 体
24	478	956	4,851	6,372

(2) 新川渓谷地区 旅館など

宿泊施設数	室 数		収 容 人 員	
	洋 室	和 室	一 般	団 体
7		94	459	534
自炊 11	11軒		444	

(3) 合 計

宿泊施設数	室 数		収 容 人 員	
	洋 室	和 室	一 般	団 体
31	478	1,050	5,310	6,906
自炊 11	11棟		444	

(注) 政府登録 6、国際観光旅館連盟加盟 7、日本観光旅館連盟加盟 12、温泉のあるホテル・旅館など 42(自炊を含む)

五 宿泊施設等の案内

2 霧島温泉地区のホテル・旅館などの案内
新川溪谷

(1) 霧島温泉地区

ホテル・旅館名	洋 室	和 室	広 間	収容人員		備 考
				一 般	団 体	
ホテル 林田温泉	226	174	4	1,300	1,500	自炊施設あり
霧 島 ホ テ ル		100	7	250	400	
霧島国際ホテル	33	171	10	910	1,020	
きりしま山脈ホテル		25	2	100	130	
つねよし荘		17	2	60	60	自炊施設あり
公 園 荘		7		20	30	
牧 水 荘		26	2	80	120	
松 苑		17	1	44	44	
ホテル静流荘		30	1	100	130	
霧島観光ホテル	30	112	7	318	600	
霧島山上ホテル	31	70	3	400	500	
湯之谷山荘		15	1	40	40	
霧島プリンスホテル	1	51	4	150	260	
新 燃 荘		10	2	30	40	
関 平 温 泉		11		30	30	自炊施設あり (自炊)
松 風 荘		7		20	21	民宿と(自炊)
ホテル霧島キャッスル	119	49	9	600	1,000	オーナーズホテル 民宿 民宿 民宿
夜 霧 荘		5	1	16	20	
花 紫		11		50	50	
霧島温泉ソサエティ	36	18	1	198	198	
み ち や 荘	2	8	1	30	40	
ツ ツ ジ 園		12	2	25	60	
野々湯温泉		10		50	50	
さ つ ま 荘		8	1	30	35	
スパヒルズ	20	56	3	333	333	
計	498	1,020	64	5,184	6,711	

第4章 今後の観光開発計画

(2) 新川溪谷地

旅館名	洋室	和室	広間	収容人員	
				一般	団体
折橋旅館		8		30	30
妙見田中会館		28	1	80	120
雅叙苑		6	1	25	40
せせらぎ荘		5		15	15
安楽荘		20	2	72	80
田島本館		6	2	13	13
華耀亭		17	1	216	216
塩浸温泉		12	2	40	40
計		102	9	491	554

(3) その他の宿泊施設

施設名	通称	収容人員	施設
鶴乃湯(鶴ヶ野)	つるの湯	50	自炊施設
大徳館(賀来)		50	〃
安栖武彦	高塩湯	30	〃
安栖フヂ		30	〃
安栖重男		20	〃
さかいだ温泉		50	〃
安栖チエ		50	〃
安栖重樹	塩湯	100	〃
佐藤圭二	塩湯	30	〃
きのこの里	日の出	20	〃
みょうばん湯		14	〃
計 11		444	〃